

幻影の国の吟遊詩人

ナムウイリク
の戦乙女

三界の扉

闘獣をこよなく愛するある貴族が、はるか異国の魔獣を得て、どれほどが経ったであろう。半年も過ぎてはいまい。にもかかわらず、かの魔獣の臓腑におさまった虎や獅子、熊達は三十頭あまり。あわれな罪人どもにいたっては、数える者すらいない。

かの魔獣の名を人々は知らなかった。魔獣を売りつけた商人は「化物」と呼び、持ち主となった貴族は洒落たつもりだったのだろうか。愛らしい少女を思わせる名をつけてはいたが、浸透はしなかった。魔獣に最も相応しい名を与えたのは、とある一人の興行師である。彼が最も大切にしていた五頭の獅子が、魔獣に食い殺された時だ。口元から鮮やかな血を溶岩のように滴らせる魔獣に、彼は声の限り罵った。

このデロアの糞犬め！

冥界神デロアの僕にして、冥府の門を守る魔犬である。

ナムウィリクはイルシュ帝国の植民都市である。また、帝国の植民地とされる以前から、闘獣が盛んに行われる町であった。帝国の支配下へ落ちるとともに、日干し煉瓦で組み上げられた昔ながらの建造物は破壊され、新たに石によって都市は造りなおされた。都市の大広場の先にそびえる闘技場が、都市で最後に完成した最も背の高い堅牢な建築物であった。この闘技場によって、かつての闘獣はこれまでにない規模と様々な演出で彩られる。ナムウィリクの人々は最も分かりやすい形で帝国の力を知ることとなった。

そのようなわけで都市の中心部は帝国風の建物が立ち並んでいた。一方で、屋根のひさしや、外壁に残された足場の木棒には、この地方独特の飾りである木製の大きな玉が彩色されて吊り下げられている。商人達は店の壁に昔ながら文様を色鮮やかに描いて人目をひき、文様に負けず劣らずの自慢の商品を並べて商売にいそしんでいる。それらは帝国の荘厳と優美を旨とする装飾様式と趣を異にしていた。

この調和とも競合ともつけかねる文化の混雑は、いずれにせよ朝の雑踏の凄まじさほどではなく、通りに蹴立てられた砂埃に白くかすんでいる。

値段の交渉に夢中になっている商売人と客、あるいは卸売商と小売商、荷台から物騒な言葉を叫んではなんとか道を確保しようという御者、スリに騒ぐ若者や、人々の足の間をぬって餌を探す野良犬に家禽、逃げ出す荷馬。叫んでみたところで、自分の声すら耳に入らぬまでの喧騒ぶりである。

遠路はるばるたどり着いた旅人達にとって、この喧騒はただの悪路よりも始末が悪い。市壁の外は灌漑用水路が張り巡らされた刈り入れ間近の田園風景が広がり、旅人の疲れた足と心を癒すのだが、一步市門をくぐれば緑などほとんどない。かわりに、ごみが所狭しと散乱した通りに人と砂埃がもうもうとしている。今は朝だからまだましであるが、昼になり気温が上がれば、わずかな湿気とともに悪臭が立ち昇り、この喧騒に付け加わる。

だからその旅人は、昼までに宿を見つけてしまいたかった。彼女は、自分の連れを休ませなければならなかった。

道にひしめく人の群れから、かの旅人の頭が突き出る。日よけのマントとフードで体を覆い、素朴な形の竪琴を人ごみに潰されぬよう頭の上ののせて片手で支えている。旅に薄汚れたその頬は、フードの中に差し込んだ朝日を受けて、なお白く輝いた。たとえそれに目を留める者がいたとしても、この人ごみでは足を止めることすらままならない。多くの人々は、あの旅人が果たして白い顔料を顔面に塗りたくっているのか、それとももともとからそのような顔色なのか、確かめるすべもない。運良く彼女を近くで見た者は、我が目を疑う。そしてもう一度よく見ようと目を凝らした時には、相手はすでに人の波に飲まれて遠ざかっている。

白面の旅人は人々のささやかな驚きを後に残しつつ、人の流れを強引に横切る。そしてようやく、人気《ひとけ》の少ない路地へと自身の体を引き出すことに成功する。最後に人ごみに残った右腕が、渾身の力をこめて引き抜かれた。

白面の旅人の右腕につながれて、幾分小柄な旅人が路地によろめき出た。彼女は倒れかけた連れの体を支え、建物を背に座らせる。連れの隣に竪琴を置くと、そのままその手をひるがえし相手のフードを脱がせてやる。擦り切れたフードの下から、濃い金褐色の短髪が現われる。少年は苦しげにまぶたを閉じ、大きく息をついた。小麦色の額にはうっすらと汗が浮き、呼吸は荒いが力のない浅いものである。彼の首には包帯が巻かれていた。

「無理をさせたね。少し休もうか」

そうつぶやいて、白面の旅人も自分のフードを後ろにはらう。

路地を歩き来していた町人は、いまやその旅人の白すぎる肌が、顔料によるものではないことを知る。顔立ちもどこか異質だ。鼻筋は通っているのに、眉間から額は妙にのっぺりしている。彼らは大分通り過ぎてから彼女を振り返り、気味悪げに目を細めてはそのまま行き過ぎる。声をかける者も、石を投げる者もない。せいぜい遠くから子どもが指をさすくらいである。

「取り替えよう」

人ならぬ女は、少年の前に片膝をつき、首筋の包帯に手を伸ばす。その声は低く静かで暗かった。故に彼女の声は発せられると同時に大通りの喧騒に流され、少年の耳には届かない。それでも彼は、彼女が包帯の結び目に両手を伸ばした時、拒否の印として彼女の腕に片手をかけた。

少年の動作は優しく、緑の瞳は穏やかでかたくなであった。

彼女は両手を下げる。

少年は自身で包帯を解く。首の後ろに当てていた布をとり、左の膝に置く。体に巻いたマントをはだけ、腰の皮袋から新しい布を取り出して首の後ろに乗せる。

彼女は少年の前に片膝をついたまま、これらの動作を見守るしかなかった。少年は緩慢な動きながらも包帯を元通り巻き終え、彼女が手出しする隙を与えない。彼女が首の傷を見せてほしいと頼むことを思い出したのは、少年が疲れきって両腕を下ろした後だった。彼女は手持ち無沙汰に、少年の膝に残された布を手取る。それはわずかに血で汚れている。

――傷はほとんどふさがったようね。

汚れた布を帯の間に挟み、彼女は立ち上がる。何気なく見上げた視線の先に、闘技場の屋上部がある。

帝国の政策で闘技場では剣闘士同士の対決が一応のメインとして行われたが、古くから闘獣に

慣れ親しんできたナムウィリクの人々には、受けが悪かった。ただ、都市の守護神が戦の女神ディアラであったことから、女性剣闘士の対決だけは好まれていた。もっともディアラは正義の戦をつかさどる神であったため、彼女に仕える闘士らが無為に命を落とすのは避けられる。そのため剣闘士達は刃を丸めた剣を使い、スポーツとして闘技は行われていた。闘技会の運営に悩んだ帝国の役人達はこれに倣って、男性の剣闘士達も切れない剣によって闘技を行い、時には一般の市民から彼らに対する挑戦者を募るという形式を採用した。これによって辛うじて剣闘試合の人気も獲得し、役人達は本国に対する面目を保ったようだ。しかしながらこの人気も、獣同士の闘獣に比べれば氷と火ほどの温度差がある。闘技場の壁に見られる落書きの多くは獅子であり虎であり熊であり、そしてかの魔獣とおぼしき獣であった。

「あそこに冥界の番犬っていうのがいるのか」

彼女は呟き、少年を振り返る。相手はわずかにうな垂れて目を閉じている。半分寝ているのかもしれない。彼女はため息を一つついて麻袋を担ぎ、少年の脇に置いた竪琴を拾って頭の上に乗せる。もう一度少年を見下ろすと、彼はぼんやりと彼女を見上げていた。右手を差し出すと、彼は大人しく手を預ける。彼女は少年を立たせ、再び大通りへと踏み出した。

――奴隷なんか盗むんじゃないか。これじゃ、私の方が前の主人よりも悪人みたいじゃないか。

彼女は白い唇を噛む。

ただ手を引いていることだけが、彼女がこの少年を引き止めておける唯一の方法だった。少年には、彼女から逃げ出すべき正当な理由がある。それでもなお、彼が敢えて彼女の手を振りほどいて逃げようとしなかったのは、傷のために体力が十分でなかったことや、逃げたところでどこにも行くあてがなかったせいだろうか。

少年はフードを深く被り、顔を隠して歩いている。彼女の視線を感じると、彼はことさらにうつむいて目を合わせまいとする。

――無視したかと思えば突然素直になるし、いい子にはしてくれてるけれど、目は合わせてくれないし。

彼女の中で苛立ちは大きくなる。

――そうね、私は盗人だわ。そしてあんたはあのひどい主人の下に帰ることもできないし、一人じゃ生きてゆくこともできない哀れな生き物で。やれやれ、かわいそうに。私を盗人と罵ったのが嘘のよう。ご主人の元に帰れないと知ると突然大人しくなって、まるで魂の抜けた木偶だ。

黒く濁った感情をかき回し、彼女はそこから気をそらそうと、ますます強く前方の闘技場を睨みつける。

彼女は、少年を助けたと思っていた。いつ死ぬかも分からぬ生活から救ったのだから、相手もそれを喜んでくれると思ったのだ。ところが彼は彼女を盗人呼ばわりした。彼女はその言葉に衝撃を受けた。それでも挫けることなく少年の傷の手当てをし、自分の食料を削ってでも彼に一人前の食事を取らせてきたのは、相手の考え方の方が何かの間違いだと信じていたからだ。ところが彼は、彼女の一連の親切などただの筋違いなおせっかいだといわんばかりに、頑なな態度をとり続けた。態度を軟化させたと思って彼女が油断すれば、必ずすぐ後に拒否の仕草を出し、油断

した彼女の心を手ひどく痛めつける。

彼女は思い悩み、徐々に疲れ果て追い詰められていた。

——異人の私と、奴隷だったけど人間であるこの子は、結局違うというわけか。妙な同情を持つんじゃなかった。闘技場の裏手の死体置き場に、そのまま寝かせておくんだった。帝都なら、他に拾ってくれる人間だっていたはずだもの。

そのような考えが浮び、少年に新しい主人を見つけて手放すべきだという思いも日増しに強くなる。

ぷつりと、そこで思考の糸が切れる。彼女は頭を振った。卑屈な感情と物思いは心の底に再び沈降し、通りの雑音が一気に耳へ戻って来る。彼女の右手には、少年の左手首があった。

——思い出しなさい。この子はあれから随分だんまりを決めこんでるじゃない。私一人であれこれ考えても仕方がないわ。それより今は、もっと単純な問題を片付けなさいと。

彼女は闘技場を見上げ、足を速める。

彼女はすでに文無しであった。彼女が最後に食事をしたのは二日前であり、少年は昨日の朝が最後であった。要するに彼女は糧を必要とし、それを得る財産を調達せねばならなかった。少年の傷に塗る薬も買わねばならなかった。こちらは特に高価だった。彼女の弾き語りごときで賄える額ではない。彼女は豎琴と歌以外の技能を使って稼がざるを得ないところに来ていた。人が集まるこの場所は、客を引くには都合がいい。

ナムウィリクの闘技場は規模こそ小さくあれ、石造りの立派な建築物である。壁の下方は白地に赤、緑、青の文様が施され、柱頭に無理やり差し込まれた鉤から極彩色に彩られた木や皮の丸い玉がいくつも吊り下げられている。内部に通じる門は柵で閉じられ、奥はひっそりと冷たい。対照的に、闘技場外周を取り巻く回廊は、通りに向けていくつもの露店が朝早くからひしめいている。

異人の旅人は少年に豎琴を預け、柵の脇に座らせた。彼は黙って座り、じっと露店の一つを見つめている。そこでは今しも新鮮な鱸がさばかれ、赤や緑の香辛料とともに銅板の上でじゅうじゅうと焼かれている。

「見るだけならいくらでも」

彼女は軽くため息をつく。少年の様子を気遣いながらも、何気なく柵に歩み寄り、通路の奥を窺った。この先は客席にでもつながっているのだろうか。風の吹きすさぶ音が暗闇の向こうに響いている。そこでふと、奇妙な気配をその奥に感じた。人間達と異なる世界の息吹だ。

彼女は魔法を用いて建物内部を探ることにする。彼女は柵を両手に握り、目を閉じて意識を集中させる。

通路に落ちる影に自身の魔力をなじませ、魔法の視覚を少しずつ通路の奥へと進ませた。彼女の魔法は影に沿いながら通路奥の脇に見つけた地下への階段まで達する。階段の壁に穿たれた穴で燃える灯火が、彼女の侵入を危うくする。また火が灯っているということは、中に人がいる証である。彼女は魔法の視覚を、その道筋たるより深い闇を探して、壁の石積みの際間を這わせる

「おい、ねえちゃん」

男の低くざらついた声が、地下へ意識を飛ばしていた耳に突き刺さる。彼女は息を詰めて目を開ける。四十がらみの男の仏頂面が柵越しに見えた。癖の強い黒髪は短く切りそろえられ、香油でてかっている。厚いまぶたの下からは、血走った黒い目が彼女を睨みつけていた。

背の高い彼女は、男の薄くなりかけている頭頂部を見下ろすことができた。彼女はいまだ地下に飛ばした意識を、心に戻しきれない。何が起こったのか理解できず、柵を両手でつかんだまま何の意味もなく男と睨みあうことになる。

誰かが彼女の袖を引き、彼女を下がらせる。

「脇へ」

少年の声が肩越しに聞こえ、彼女はようやく柵から離れる。男は鍵をがちゃつかせながら柵を開け、表に出てきた。男は彼女の頭からつま先まで、油断のない目つきで素早く睨め回し、鼻を鳴らした。

「随分でかい女だな。首と足で身長をかせいでるってどこか。首の長い女は好みだが、胴回りは細いし胸もたいしたことねえな。しかし、色味のない肌だな。石像かと思うたわ。彫刻愛好家にゃ受けはいいだろうが、俺達みたいな普通の人間にゃ、まだ石像を抱いた方がましだて。ここいらより、東の界隈の方が稼げるぞ」

そこで男は口をつぐんだ。異人の髪が美しかったからである。灼熱の陽光をより合わせた淡い金髪がフードから零れ落ち、あらわな首筋から胸を這って膝まで結われることなく流れ落ちていた。

異人の方は瞳を精一杯見開いて、目の前の男が何者なのかを考えようとしていた。

身なりは良い。そこだけを見れば裕福な市民とも言える。しかし男の浅黒い顔には殺気立つような厳しさがあり、頬には皺とは言えない縦の線が一筋はいつている。

意識がようやく体になじみ、彼女の頭も正常に働きだす。この男は門の鍵を持っていた。闘技場の関係者に違いない。同時に男が彼女に向けて発した言葉を思い出し、腹を立てる。

「いきなり何。まるで人を商売女みたいに。楽器を持っているでしょう」

「同じようなもんだろうが」

男は乱暴に彼女を押しつけて通りに出ようとする。その時、彼女の後ろにいた少年に気づく。少年はよろめきながら道をあけた。

「ほう、こっちは人間か。西の生まれか。ほう、きれいな顔をしとるな」

「ちょっと！」

彼女は叫び、素早く少年のフードを顎まで引き下げ、彼を守るように立ちはだかった。

「勝手に見たてないで！ 一体、なんなのよ」

「そうかいそうかい。悪かったな」

男はうるさげに片手をあげ、そそくさと通りへ立ち去ろうとする。彼女はその腕を素早くつかんだ。

「おい！ お前こそなんなんだ！ お互いもう用はなかろうが！ 触るな、気色悪い」

男は勢いよく腕を回し、振り返りもせず彼女の手を払う。

「待って」

彼女は素早く男の前に回り込む。

「ここの闘技場に冥界の番犬がいるって……」

「いるぞ！ それがどうした！」

男は彼女がみなまで言う前に、怒鳴り返した。その額に、太い血管が浮き上がっている。陰のある瞳がさらにぎらつき、彼女を睨みつけた。

「あの糞犬がどうした！ 今日も世話係を一人食っちまった！ あの野郎、人間様を食うたびにぶくぶく太っていきやがる！ 奴の口こそが冥界の扉だ！ そしてこの世の冥界が奴の腹の中にあるんだ！」

「この建物の中にいるのね。そんな危険な生き物、なぜ殺さないの」

「持ち主に言ってくれ」

男は真顔に戻って呟く。

「持ち主はあれに魅了されとる。あれの強さを自分の強さだと思いこんどる。始末するなんぞ夢にも思わんだらうて」

いつしか二人を囲む人垣ができています。露店の前をふさがれた壺売りの女は、顎をしゃくって露骨に顔をしかめている。少年は、柵の側で豎琴を抱えてぼんやりと座り込んでいた。

「なら、探してるんでしょ。あれよりも強い勇士を」

彼女は男に近づき、顔の上にかがみこむ。濃い緑に縁取られた金色の瞳が男を見据える。異人の瞳を目前にして、男は慌てて顔の前で魔除けの印をきった。

「何の話だ。俺は忙しいんだ」

彼女はその手を掴んで止める。男は抵抗しようと腕に力をこめたが、彼女の瘦せた腕はびくともしなかった。それこそ男は本当に、重たい石像に捕まったかと思った。

「始末する方法は？」

「何をいうか」

彼は脇を向いてふてぶてしく笑う。力を緩めた彼女から自分の腕をもぎ取ると、男は一步引いて両足を踏ん張り、広場中にとどろくかのように彼女を怒鳴りつけた。

「真っ向勝負だ！ 奴も見てる前で、あの糞犬を叩き潰す！ そうすりゃ奴だって文句は言えんわ！ 公明正大な試合だ！ 俺の胸も爽快ってもんだ！」

男は鼻息も荒くまくし立て、火のように激しい笑い声をたてた。集まった群衆の中には、同情するように苦笑を浮かべる者もいる。異人は眉をひそめる。彼女はしばらく男を笑わせたままにした。そしておもむろに彼に近づくと、肩に手をかけ耳元で囁いた。

「私が仕留めてみせましょうか」

彼女はゆっくりと肩から手を離し、男を見下ろす。男は幻聴でも聞こえたとばかりに、耳に手を当てて退いた。

「今、なんか言ったか」

「聞こえたはずよ。魔法で声を耳の奥まで運んだからね。それで私は誰に会えば闘技にでれる？」

東の界隈とやらより、稼げそうね」

男は心底嫌そうな顔で彼女を見上げた。この異人は頭がおかしいか、ただの馬鹿なのか、はたまた妙な趣向の自殺志願者か、いずれとも判別をつけかねたのだ。かといって男は、せっかくの珍しい異人をこのまま放っておくのは実に惜しいことだと気がついた。

「……手配してやってもいい。ひと月後に闘技会があるからな」

やっとのことで男は答える。

「だが、俺も暇じゃない。嘘やはったりにつき合うつもりはない。お前の実力を測らにゃならん。例えば、こんな風にだ！」

言いざまに男は懐から短剣を引き抜き、彼女の顎の下に突きつけた。人垣から女性の悲鳴が上がる。

「何がしたいの？」

彼女は男の突き出した腕を眺めながら、とりあえず聞いてやった。男の意図はだいたい読めていた。

「こんなちっぽけな刃物を恐がるようじゃ、話にならんってことだ……」

男は決まり悪げに答える。そして、ついて来いと手を振って通りに歩みだした。人垣も事が終わったことを知り、自然と崩れていく。彼らの胸には近々面白い見世物が起こるのではという期待が残されている。

「ったく。俺の腕も鈍ったもんだ。女一人脅せん太刀筋か」

彼女の前に行く男は、ぶつぶつと愚痴っている。少年の手をひきながら、彼女は男に声をかける。

「あなたは、闘技場の管理人？」

「俺はただの興行師だ。くそっ、馴れ馴れしいぞ！ お前、異人の立場をわきまえろ！」

「あら、ごめんなさい」

「『失礼しました』だろうが！」

男は青筋を立てて振り返り、彼女の後ろに少年がいることに気がつく。

「おい！ その小僧まで引き受けた覚えはないぞ。だいたい、何で手を引いとるんだ。異人のくせに、人間のひも持ちか。気色悪い。手を離せ。追い払え」

「怪我をしているんです。一人じゃ、まだ歩けません。手を離したら、人ごみに流されるわ」

「流せ！　きれいな顔をしとるんだ。他の金持ち女が拾ってくれるわ！」

男は高い壁に囲まれた建物の前で立ち止まる。壁同様に高い木の柵越しに一声怒鳴ると、建物から一人の薄汚れた子どもが現われる。男は彼女を指差しながら子どもに何事か伝えている。

彼女は少年と向かい合った。少年は相変わらず穏やかな表情のまま、彼女を見る瞳だけが鋭さを帯びている。彼女はなんと行ってよいか分からず、空を振り仰いだ。

「どこに行けるわけでもない」

少年の突然の言葉は、危うく聞き逃すほどの小さな声だった。彼は相手の答えを待つことなくゆっくりと背を向けると、壁に手をつきながら彼女から離れ、曲がり角に腰を下ろした。彼女は少年の側に駆け寄り、自分のマントを旅の荷物ごと彼の隣に下ろす。腰帯から刃の欠けた短剣を取り出し、肩から垂れている金髪の一房を断ち切る。

「エカル」

彼女は少年の名を呼んだ。

「異人の髪は人間のものより高く売れる。これで銀一枚にはなるはずだから、うまく使って。これもね。一仕事終わったら、探しに来る」

少年は返事をしなかった。ただ、差し出された髪と短剣は素直に受け取った。彼女は豎琴一つを抱えて、男の側に戻る。最後に一度だけ、少年を振り返る。相手は不器用な様子で、彼女の金髪と短剣を懐に納めていた。

男は柵を開け、彼女に中に入るよう促した。

興行師の名はカファスと言ひ、冥界の番犬の名付け親にして、貴族クディブから番犬を預かる身であった。カファスは各地の猛獣を集めて飼っており、獰猛な獣の扱いに長けている。そのためクディブは例の魔獣の世話を彼に委託し、結構な謝礼も払っていた。

ところが番犬の世話は困難を極める。カファスは猛獣の世話を熟練した奴隷を何人も失う羽目となった。クディブは交渉人を介してかなりの賠償金を払ったが、カファスには何の慰めともならなかった。猛獣の世話役が減ったことで、彼は何頭かの虎やサイを手放さざるを得なくなったのである。それらの獣は興行で、番犬に向かってけしかけられた。彼らが勝ってくればまだ良かったのだが、結果は番犬の圧勝である。カファスが受け取ったのはまたしても、闘技会主催者からの番犬に食い殺された獣に対する僅かな賠償金であった。

カファスとしては、これらの賠償金全てを番犬の上に積み上げて、圧死させたいとどんなに思っただろう。番犬の犠牲となった獣や奴隷達は、彼が様々な土地を廻り大変な苦勞をして集めた、いわば彼の人生そのものだったのだ。彼の年ではもはややり直しはきかない。彼はそれらを永遠に失ったのである。

カファスには、番犬の世話をする以外に道はなかった。番犬の世話賃は、落ちぶれた今となっては彼の重要な収入源だった。

「あの魔獣を冥界に叩き返してくれたら、おれが今まで奴のために手にしてきた賠償金を全部くれてやるぞ」

カファスは異人の娘を建物の奥にいざなう。かすかに、女のものと思われる威勢の良い掛け声が聞こえる。

「魔獣って。育ちすぎた獅子とか熊とか、そういうのかしらね」

闘技場の奥にあった気配を思い出しながら、彼女はうそぶいてみる。案の定、相手は良い顔をしなかった。

「……お前が強いと分かったら、後で会わせてやる。他に使い道がなかったら、興行で『動く女神像』とかの文句で見世物になってもらうからな」

「……私、大抵のものになら勝てるから。心配しなくてもいいわよ」

カファスは首を振った。本格的にこの異人は頭がおかしい。彼は通路の先の木戸を開けた。

小さな部屋には、左目を眼帯で覆った坊主頭の男がいた。年の頃はカファスと同じに見える。男は窓枠に腰掛け、外を眺めていたようだった。部屋に入ってきたカファスを顔半分の笑顔で迎

える。彼の左半分の顔は古い傷跡で凸凹になっており、頬の筋肉が思うように動かないらしい。男は片目を異人の娘に向ける。

「また珍しいもんを連れて来ましたねえ」

男はやや不明瞭な発音でカファスにそう言う。カファスは不機嫌な相好を崩さない。彼は娘の前で遠慮なしに、彼女の頭を指差しながら男に掃き捨てる。

「こいつの腕っ節と、脳の空き加減を見立ててやってくれ。魔法と聞いたときにや、ちょっとはやるんじゃないかと錯覚したんだが、ここに来るまでにどうしようもないアホさ加減を露呈してきやがった」

「うちの女戦士どもとやらせてみますか。こんな細長い娘、四つに折って薪にしちまいそうな奴らですが」

男は両腕を広げ、部屋の左右の壁にゆったりと手をつき、二人の来客を見下ろす。彼女はその片目を睨み返ししながら、この部屋が小さすぎるのか男が大きすぎるだけなのか、暇つぶしに考えていた。男の日に焼けた左腕には、火傷の跡のような引き攣れが見られる。

「まかせる。俺は一仕事に出るから、今夜までに知らせてくれ。使えそうなら、興行の日までここに部屋をつくってやってくれ」

カファスはそれだけ告げると、異人の娘の腕をつかんで男の方へ引き出し、自分はさっさと部屋を後にした。

男は短い間面白げに彼女の姿を眺め下ろすと、腕を組んで姿勢を正す。彼女は胸に抱いた豎琴を握る手に、そっと力をこめた。天板のひび割れた粗末な机と、小さな腰掛くらいしか目に付かない粗末な狭い部屋だ。男の坊主頭は天井に届いている。窓には青銅の透かし枠がはめ込まれ、そこから差し込む白い日差しの中で、砂埃が輝いて舞っている。外からは相変わらず女達の掛け声が届いていた。

「なんて名前だ」

男の顔は、まったくの無表情に戻っている。彼女は相手の片目をじっと見つめた。ほとんど獣同士の睨み合いだ。先に視線を逸らせば、負けるような気がする。彼女はじりじりと間合いを取りながら答える。

「エルヤ」

「そうか」

とたんに男は破顔した。

「意外と人間っぽい名前だなあ。偽名だろ。ま、どっちゃでもいい」

男の声の調子は明るく高くなり、彼は気軽な様子でひび割れた机の上を叩く。太い指の下で、机は乾いた悲鳴と砂埃を上げる。

「その得物はここに置いとけ。あと、その邪魔な長ったらしいスカートもここだ。腰布の巻き方は知ってるんだろうな」

「し、知っているけど」

男の思いがけない豹変に、エルヤは息を吞まれて瞬きを繰り返す。男は自分の腰に幾本も巻きつけた革のベルトを一つはずし、彼女に差し出した。

「服は全部脱げ。腰巻は解けんようにこれでしっかり縛り上げろ。今つけてる帯は、胸に巻け。とにかく動きやすい格好になるんだ。髪もまとめ上げろ。長すぎる。すぐ始めるぞ。木剣は外にあるからな。おい、……何ぼっとしてる。早く用意しろ」

「いや、あの……」

恐ろしい形相の男が皮ベルトを片手にさばさばと迫ってくる。エルヤはよろよろと壁際に追い詰められた。

「私もそうしたいんだけど、出て行ってもらわないと、着替えられないし……」

それを聞いた男の目が点になる。彼は肩を下げ、くだらないといった風に鼻を鳴らした。

「どこのお姫様だ」

それでも男はベルトを彼女の首にかけると、背中をかがめて戸口をくぐり部屋を出て行った。

「バド、で、どうだった。あの異人は」

澀ばかりの濁った葡萄酒をあおり、カファスは隣の席に腰掛ける坊主頭の男を見上げる。

「お前の女剣闘士どもにひねり殺されたか？」

「いえ、それは危ういところで止めましたがね」

「それみたことか！」

カファスは器に盛られた干し果実を口の中に放りこむ。そしてすぐに床へ吐き出した。

「くそ！ 虫が巣をつくっとるじゃないか。酒もすっぱいばかりだ。こんな安酒場なんぞ燃えちまえ！ 酒神の怒りが落ちればいい！」

落ちぶれた興行師は怒鳴り散らし、酒の杯を通りすがりの給仕に投げつける。木杯は給仕の胸に当たり、残っていた葡萄酒がみすぼらしい衣に大きな染みをつくる。恐らく大男のバドが側にいなければ、カファスもここまでの乱暴は働かなかっただろう。杯を投げつけられた給仕もバドの姿に恐れをなし、恨みのこもった瞳でカファスを睨みつけただけで、店の奥に引き下がった。

「明日か明後日にでも、あの娘に魔獣を見せてやったらいいでしょう。娘は勇敢とか大胆とかいう以前に、仰るとおり脳味噌が鈍いようで。多分魔獣を見ても動じないでしょう」

バドは燭台を引き寄せ、ふたつに割った果実を注意深く確かめる。

「あの異人、半殺しにされたんじゃないのか？」

「剣闘士達をまとめて全員伸した後で、ですよ。あの娘が勝って武器を手放した隙を狙って、例のハルミナが娘の髪を掴んで引き倒し、他の連中が皆、娘の胸を踏んづけたんで。見事なチームワークでしたよ。闘技の時もあんならいいんですが。ハルミナは俺より力が強いんで、取り押さえるのに大の男が三人がかりでしたな」

「ちょっと待て、あの異人、勝ったのか？」

カファスは身を乗り出す。バドは浮かない様子で頷いた。

「勝ったから、強いんでしょうなあ。見た目に寄らず、馬鹿力の持ち主ですよ。異人だからですかね。ハルミナ達がキレたのは、あの娘が魔法を使って戦ったからだと言うんです。実際に手合わせした者にしか分らんようで。女達には、あの娘が正々堂々剣だけで勝たなかったのが、卑怯と映ったんでしょう。見ていただけの俺には、いつ魔法を使ったのか分かりませんでしたわ。

ただ、魔法はともかく、あの娘は剣術の『剣』の字しか知らんのです」

「『術』を知らんと？」

「剣の持ち方はしっかりしとるんですが、大きく振り回すことしか知りませんわ。ありゃあ、絶対に」

「構わん！」

カファスは蜘蛛の巣だらけの暗い天井を見上げて、ひとしきり笑う。

「相手は番犬で、剣士じゃない。考えても見ろ！ あの馬鹿でかい奴相手じゃ、細かい剣の駆け引きなんぞ、できようができまいが関係ない。大切なのは、力と雄心だ。……女には普通どっちもないもんだが。で、娘の怪我はたいしたことないんだろう？ 明日、明後日連れ出せるってことは」

「打撲だけです。なんでも、これもやっぱり魔法を使って、女達の脚力から我と我が身を守ったとか何とか。当日は面白い試合になるかもしれませんな。それより、異人を闘技に出せるんですかい？ 規定じゃ、異人の出場は罪人である場合を除いて、禁止されとるんでしょ」

「それは俺が何とかして見せる」

カファスは天井の闇を凝視した。

「あの糞犬を始末できるなら、何が何でもあの異人の出場を、クディブと主催者に認めさせるぞ」

「なら俺は、あの娘の体調を試合日までに万全にさせときますよ。今はちょっと痩せすぎなんで、いいもんを食わせてやらにゃ……」

バドは果実をほおぼる。いつのものとも知れない干し果実は、海綿を噛むように甘みも味も何もなかった。

「……あの娘の食事代とか世話賃はいただけるんでしょな」

「分かった、分かった」

カファスは鼻を鳴らす。

「娘にやる約束をした俺の賠償金の中から払う」

「やれやれ、あの娘もかわいそうになぁ」

「番犬を仕留めたら、俺も少しは気前良くなれるわい」

肩で笑うバドの隣で、カファスは苦々しげに呟く。それから二人はしばらく黙った。酒場の一角で喧嘩が持ち上がったらしく、景気の悪い陰気な店が若い男達の怒声で賑やかになる。

「……仕留められんでも、あの娘はここいらじゃ見たこともない異人だ」

カファスは暗い顔つきで唸り、腕を組んでマントの中に首をうずめる。声色は先程とは対照的に、ひどく冷めていた。

「期待してないんですかい」

「期待できるか。今まで何人の男が奴に挑んで、空しい結果に終わったか。中には魔法使いもいたが、観客席に被害を出したばかりで糞犬はケロリとしとったじゃないか。あの異人に声をかけられたときゃ、俺もどうかしとったんだよ。でもなぁ、あの異人を俺の名義で闘技に出しゃ、そこそいい金が手に入るんだ。あのいかれた異人から俺が得られる慰めは、それだ」

「異人っても、たかだか小娘をそういう風に扱うのは感心しませんけどなあ。番犬にけしかけようとしてる俺も、人のことはいえたもんじゃないが。……おい！ 喧嘩なら向こうでやれ！」

二人の食卓の上に、男が一人投げ出されてきた。卓上の杯が倒れて酒が飛び散り、ひっくり返った器の干し果実がカファスの顔めがけて放り出される。カファスは迷惑げに顔をしかめ、バドは男の首根っこを捕まえて食卓から引き摺り下ろす。男は地面に落とされてうめき声を上げた。その声を聞いて、バドは再び男を自分の目の前に掴み上げる。張りのあるなめらかな頬と濡れて輝く瞳が、バドの目に入った。ひどく若い男だった。むしろ少年である。彫りの深い面立ちが暗がりの中で繊細な陰影を描き、痛々しいまでの若さと若さゆえの美しさを浮き上がらせていた。

カファスが少年を見上げて、思わず立ち上がる。ところが後ろからやって来た大柄の若者達に乱暴に突き倒され、食卓に上半身を突っ伏すことになった。

「じいさん、そいつを返してくれ！」

リーダー格らしい両腕に刺青をほどこした男が、少年を顎で示しながらバドに怒鳴る。

「厄介をかけといて、随分な態度だな」

バドは適当に答えを返す。掴み上げたままの少年が再びうめいた。それがあまりに苦しうであったため、バドはいったん彼を下に降ろす。すると少年はそのまま床に崩れ落ちた。バドは少年が首に巻いている布が包帯であることに気がつく。

「そいつは姐さんに失礼を働いたんだよ」

「そんなこたどうでもいいけどな、これ以上苛めると、こいつ死ぬぞ」

バドはうつ伏せの少年をひっくり返す。繊細な顔のわりに、意外と体は重くしっかりしている。

「失礼を働けるほど活きがいいとも思えんけどなあ。それともお前らが殴ったから、こうなったのか？ こいつが死んだらお前、罪人になって例の番犬の腹に行くことになるぞ」

「そいつははじめっからそんなんだ。俺達は投げ飛ばしただけだ」

刺青の男は不機嫌に吐き捨てる。バドが少年から顔を上げて男を振り返ると、いつのまにか彼らの言う「姐さん」らしき年配の女が、男の隣にしんなりと立っていた。かつては美しい女であったのだろう。体の線こそ今だ崩れてはいないようだったが、少年の若々しい顔を見た後での女の顔は、ひどく老けて疲れて見える。

カファスが若いごろつき達の後ろから、痛そうに腹を押さえて女の脇へもぞもぞと出てくる。

「あら、カファスさん。お久しぶりね」

「このすけべ女が」

カファスは振り返りもせず悪態をつき、よたよたと床の少年の側に寄った。

「いい年して、こんな若いもんを相手にするのはやめろ。どう見ても失礼を働いたのはお前の方からじゃないか。お前、今年で四十三だろが。店じゃ二十もサバを読みやがって。小僧、お前はいくつだ」

「……二十……」

カファスに足で頭をごつかれ、少年がうめくように答える。バドはため息をついた。

「こっちも年齢偽称だな。声変わりもしとらんくせに。体はそこそこ成長しとるが、無理やり鍛

えた感じだな。どう見ても十六、七がいいとこだ。……まさか十五じゃないだろうな」

「金持ち女が拾うと言ったんだが。二十七も年上の娼館の女主人が相手じゃ、さすがに哀れだわい」

カファスは女を振り返る。彼女は斜に構えて腕を組み、紅でねっとりと輝く厚い唇をゆがめて見せた。

「横取りするつもり？」

「こいつは俺が貰うぞ」

「いやね。カファスさん。そんな趣味がおありなの？」

「なんで俺がお前と男を取りあわにゃいかんのだ」

カファスはバドに、少年を外の荷車まで運ぶよう指で示す。

「この小僧は俺の知り合いの連れなんだよ。悪いな、ミリエラ。今度の収穫祭で開かれる闘技でどえらい事が起こったら、埋め合わせにお前の店で大盤振る舞いしてやるぞ」

「口だけよ」

女は上唇を引きつらせて嫌悪の表情を浮かべ、バドに抱えられ店の外に運ばれる少年を未練たっぷりに横目で追った。カファスは今でも彼女の店の常連で、かつては非常なお大尽であったから、それ以上追うようなまねはしなかった。

「さて、いい働き手が手に入ったわい。人質はお前がとっとるんだ。逃げもせんだろう。元気になったら家の力仕事を任せられる」

店の外に出たカファスは、さっそく荷台のエカルを覗き込む。少年は横向きに寝かされており、頭を折り畳んだマントの上に乗せて目を閉じていた。

「こいつ、こんなものを持ってましたが」

バドがカファスに、月光にはじけて輝く金糸の束を差し出す。

「あの異人の髪だ。これは喧嘩の仲裁料としてもらっておこう。お前、先に俺の屋敷へこいつを運んでいってくれんか。俺はこれでまともな酒とつまみを買ってくる」

「俺は明日があるんで、屋敷に届けて酒をちょっと頂いたら、すぐに帰りますよ。それにしても、今日は久しぶりに楽しい一日でしたわ」

バドは驢馬を荷車につないで手綱を取る。

「気晴らしにはなったがな。明後日、娘に番犬を見せても逃げ出したりしなかったら、またお楽しみが増えるぞ」

カファスはそう言い残し、唯一の確かな楽しみを求めて、そそくさと宵の市に向かって去った。

結局、カファスがエルヤを魔獣に会わせたのは、四日後のことであった。彼は朝の暗いうちから女性剣闘士訓練所に現われ、エルヤにマントをすっぽりと被らせて連れ出した。彼は闘技当日まで、異人の存在をできる限り隠したがったようだった。そうでなくとも白く目立つ彼女は、町に踏み入ったその日から人々の噂の口にのぼっていたのである。魔獣の持ち主である貴族に、魔獣に対する挑戦者を熱心に支援していることを知られたくないカファスは、ひどく神経質になっ

ていた。

冥界の番犬は、闘技場の地下で飼われていた。魔獣を売りに来た商人は、魔獣を大人しくさせるため、麻薬の一種である薬草を大量に使っていた。薬草はあまりに高価であり、魔獣を得たクディブもこの薬草を与えて飼いつづけることは望まなかったようだ。闘技場の最も頑丈な檻に閉じ込めっぱなしにすることで、薬草を買う必要を失くした。この檻は両脇が石材の壁で、前後の壁は太い鉄柵となっている。鉄柵は落とし扉になっており、一方は闘技場内部に、もう一方はアリーナへ向かって開いている。鉄柵の開閉は、檻の上に設けられた機械室で行われた。魔獣は麻薬で眠らされた状態でこの檻に運び込まれた。建物内部へ通じる鉄柵が下ろされた後、すぐさま石材が柵の前に積み上げられ、餌を投げ入れる穴を一部に残した以外は全て壁として塗り込められた。魔獣が何かの間違いで、町の方へと逃げ出すのを防ぐためであった。

魔獣を闘技へ出す際はアリーナへと続く鉄柵が上げられ、魔獣は地上から漂う濃い餌の気配に誘われて、狭い通路を潜り抜けアリーナへと登っていく。闘技が終われば、檻の中に餌が投げ込まれ、魔獣は再びその匂いに誘われて檻に戻る。

この恐ろしい魔獣に打ち勝ち、名声を得ようと挑戦する者は数多かった。猛獣使い達は自身の持つ最強の獣で、腕に覚えのある者は自らの武器を持って、魔獣に挑んだのである。その度に魔獣は無慈悲な牙で獣を噛み砕き、剣をへし折って使い手を食い散らかした。人々が酒の肴としてことさら話すのを好んだ対決は、魔獣が巨大な象と戦った試合と、辺境からやってきた魔法使いと戦った試合であった。さしもの魔獣も、頑丈な牙を持つ自分よりふた周りも巨大な相手に、苦戦を強いられた。しかし牙で激しく突かれながらも敵の体に食いつき、ついに咽もとを爪で切り裂いた瞬間は、人々の心に輝かしく焼きついていった。魔法使いの方はというと、本人の奮闘よりも、魔法の火が観客席に飛んで事故を起こした事でよく覚えられていた。

異人はその魔獣を、餌入れの穴の向こうにじっと見つめた。

日が昇り、バドは朝食をとりに食堂へ赴く途中、訓練場のベンチに一人腰掛けている彼女を見つけた。

「なんだ。もう帰ってたのか」

声をかけたが、彼女はちらりはこちらを見返しただけで再びうつむいた。その顔つきはひどく張り詰め、決心に研ぎ澄まされて輝くように見えた。そのためバドは思わずベンチに歩み寄り、隣に腰掛けた。

「やめてもいいんだぞ。いっとくが、それが普通だぞ。あんなものに勝てると思う方が、どうかしてるんだからな。なんたって魔獣というくらいだ。奴と目を合わせるだけでも、頭がおかしくなる。なんでこれまで、魔獣の飼育係が何人も喰われてるのか、それだけでも分かるだろう」

うつむいた異人の横顔は、長い白金の髪に隠れて見えない。彼女はベンチの後ろの壁にもたれて、片足で地面の砂をいじっている。

「やめない。あの化け物は、私のような異人には、ちょっと弱く見えるものですからね。あなた達の見ているようには見えないのよ」

本人がこう答えているならば、自分としては何も問題はない。バドはそう考えたが、どうにも腑に落ちないところがあった。娘の不明を修正してやりたくてたまらない。彼は砂をいじる白い

裸足の指先を視線で追う。その足を見て、本当にこの娘は大理石の彫像のようだと思った。その肌の下に血管が通い、温かい血液が流れていることなど、到底想像だにできない。また彼は、腰巻と胸帯だけの異人の体に、幾つかの古傷の跡があるのを見ることができた。石のように見える肌も、やはり人間と同じように、強い力を受ければ崩れるのではなく裂けてしまうのだ。その古傷が、闘獣士達の体に刻まれているものとほぼ同等のものだということも、彼は見立てることができた。

「お前、本当に歌人なのか？」

「そうだったらいいんだけど」

エルヤはため息をつく。それから腕を上げて長い髪を肩の後ろにやる。瞳は冷え冷えと彼に据えられた。

「カファスさんに言って、頑丈で重たい剣を二振り特注で用意してもらって。とにかく、折れないのがほしい。あと、闘技会で太鼓を叩く楽士隊がいるでしょ？ 彼らにも、私が教える幾つかのリズムを覚えてもらいたい。そうしてくれたら、私は魔獣を倒せると思う」

「はあ？ 剣はともかく、なんで太鼓が必要なんだ？」

「私、剣術を知らないでしょ。だから、太鼓で戦いのリズムを掴むの」

「なんだそれは」

「見れば分かる」

「やっぱり魔獣と戦うのはやめた方が良くないかねえ。俺達からすりゃ、お前の見納めくらいにしかならないと思うんだが」

「何よ。この間までさんざん人を焚き付けてたくせに」

エルヤはすっと立ち上がり、仁王立ちになって彼を見下ろした。対してバドは、額に横皺をいくつも寄せて、柱のように背の高い娘を仰ぐ。娘の口角が僅かに上がり、瞳が冷たく輝いてどことなく勝ち誇った表情である。

「それとも、私に情が移ったのかしら？」

「お前は度をすぎた、かわいそうなくらいの馬鹿娘だからな。馬鹿な子ほどかわいいと言うからなあ」

「なんだ。否定しないんだ。素直ね」

「年をくってからは、できるだけ素直になるようにはしとる。でも、俺を味方につけたと勘違いすんじゃないよ。利益を確かにしたきゃ、カファスさんに媚びとけ。お前の食費代で、取り分がどんどん削られとるからな。応援はしてやる」

「話は変わるけど、エカルは元気にしてます？ 結局カファスさんが引き取ってくれたんでしょ？」

「二晩休ませたら、一人で起き上がるようになったそう。カファスさんの屋敷は、今じゃくたびれた料理女一人しか働いてないから、男手があるといろいろ便利だろう」

「それを聞いて安心しました」

「あれはいったいお前のなんなんだ？」

「拾った仔犬です」

「飼い慣らしていたようには見えん。油断してると、噛み付かれるぞ」

「噛み付いたら噛み返してやります。喧嘩できるようになるだけでも、大きな進歩だわ」

「そういう意味じゃない。あいつは前の主人への忠誠をだな……」

「知っています」

彼女は短いため息をつく。それからすぐにその顔を引き締めて、訓練場の隅へと大股で立ち去った。そこには戦の女神ディアラの小さな祭壇が設けられている。彼女は、朝食を済ませた他の女剣闘士達が訓練の前に祈りを捧げられるよう、祭壇を掃除し灯火台に油を注ぐ。そして、一列に並べた五つの灯火台の上で片手をひらめかせる。五つの小さな炎が、ぱっと同時に灯火台の芯に燃え上がった。バドはひどく感心して目を丸くする。エルヤは半身だけ振り返りバドの反応を確かめて、こんなことはなんでもないんだという風に、つんと澄ましてみせた。灯火台を配置すると、訓練道具を出すために倉庫へ向かって颯爽と立ち去って行く。

朝晩の冷え込みが厳しくなるごとに、木々はその葉を錆び色に染め、実を膨らませていった。都市周辺に広がる田園はすでに麦の刈り入れが終わり、剥き出しになった農地に家畜が放たれている。市壁の外に住む農民達もこの日は晴れ着をまとって都市の収穫祭へとつめかけ、豊穡の女神の神殿に供物を捧げる。白い石を積み上げた戦の女神の神殿もまた、昔ながらの木製の玉が数多く飾られ、太古と変わらず額を赤く染めた女達が、奉納の闘技を控えてぞくぞくと訪れる。彼女達は鍛え抜かれた男顔負けの肉体をあらわにし、金色に輝く兜と盾、そして槍を持って神殿前を行進する。彼女達の兜にはそれぞれ麦や葡萄、木彫りの小さな羊や鳥がくくりつけられ、柘榴の粒は蔦の冠に編みこまれて宝石となっている。それは、ディアラの乙女達と呼ばれる戦乙女達の姿を模していた。乙女達は戦場に舞い降り、流された血を豊かな土に変える女神の侍女である。彼女達は多くの場合、女神像の足もとに小さな石像として飾られるのが常であった。しかし巨大なこの神殿では、内陣を囲む形で乙女達にそれぞれの祭壇を設けていた。剣闘士達は自分達が扮した乙女の像に各々自身の髪を捧げ、ついでディアラの加護を求めて女神像に祈るのである。豪華な彼女達の姿は収穫祭の見せ場のひとつでもあり、人々は神殿の前に押しかけて儀式の見物を楽しんだ。

一方エルヤはと言うと、カファスに護送車のような馬車に押し込まれ、一人冷え冷えとした闘技場の地下室へと送られていた。その日の朝は他の剣闘士達の着付けを手伝い、金色の盾や見事な装飾の兜にため息をつき、自分も少くくはこういった格好をさせてもらえるのかと、半ば期待していたのである。彼女が入れられた地下室は、どう見ても猛獣の檻である。ふて腐れて檻の真ん中に立ち尽くすエルヤに、カファスは告げた。

「お前は猛獣だ。猛獣として闘技に出る」

「どういうこと……」

カファスは檻の出入り口に立ち、必要ならばいつでも外に出て檻の扉を閉められるよう、若干体を構えている。彼は不機嫌そのもののエルヤに、ゆっくりと言って聞かせる。

「つまりだ。闘技会の規定では異人は出場できん。いいか、お前は『異人』なんだ。人間じゃねえ。つまり、猛獣として出場リストに登録することしかできんかったんだ」

言い終わるが早いか、地下室に低い唸り声と、砂のついたサンダルが石の上で滑る音、青銅の柵の扉が閉められる騒々しい音が立て続けに響く。カファスはすんでのところまで檻の外に逃れて扉を閉め、エルヤは突進して青銅の柵を両手に掴み、両者はお互いにらみ合っていた。

「私が猛獣ですって！ ふざけないで！ 私は『人』だ！」

エルヤは扉の柵に手をかけて引っ張る。カファスもその扉を開けさせまいと、片足を柵にかけて踏ん張った。扉はまだ鍵をかけられていなかったのである。

「他に方法がなかったんだ！ ちったあ俺の苦労も考えろ！」

「何が苦労よ！ こっちはこれから命かけんのよっ！ 人として戦わせろ！」

「大会の規定とプログラムの都合の上でだけだ！ 俺は別にお前が人じゃないとは言っとらんだろ！」

二人の間で、青銅の扉がギイギイと悲鳴を上げる。顔を引きつらせた闘技場の奴隷が、そろそろと近づいてきてカファスに来客を告げる。

「とにかくいったん押さえろ！ お前の注文どおり、剣が届いたから！」

そこでエルヤは憤然としたまま扉から手を離し、腕を組んで地面にどかりと胡坐をかいた。カファスは額の汗をぬぐって、来客を通すよう奴隷に伝える。間もなく石段を下る複数の足音が聞こえて、狭い階段からバドの坊主頭が陰気に現われた。弱い松明の明かりだけで見る彼の姿は、地下の溶岩に立って世界を支える巨人族を思わせる不気味さである。彼の後から小柄な影が続く。その相手を見て、エルヤはさっと立ち上がる。

「剣一本の重さが、男一人が両手で扱える程度。切れ味よりも頑丈で折れないことが大事。これでいいな」

バドは抱えていた長細い包みをエルヤのほうへ差し出す。後ろに立つエカルも同じ包みを紐でぶら下げていた。カファスは檻の扉を開ける。バドとエカルは檻の中に入り、エルヤの足もとに剣を置いて包みを解いた。

刀身が松明の明かりを金色に跳ね返す。エルヤはエカルを気にしながらも、それらの剣を両の手にとって持ち上げる。檻の真ん中に立って、それらを交互に振った。

「どこからそんな力が出るんだ……」

カファスは檻から後ずさり呟く。エカルも、そろそろとカファスの近くに寄った。

「どんな感じだ？ だめだったら、この間試作して見せた剣も持って来ているが」

バドはエルヤの怪力を見るのは初めてではない。彼はそれが魔法によることを知っている。

「これでいい。なるべく短時間で勝負を決めるわ」

エルヤは剣を包みの上に戻し、じっと剣を見つめると満足げに頷く。折りしも、石の壁を通して陽気な楽の音が響いてくる。闘技会の開催を告げるパレードが始まったのだ。

「魔獣との闘技は、あのパレードの後だ」

カファスは地上からのかすかな音色に耳を傾ける。

「今のうちに用意しとけ。俺達は観客席で見せてもらう」

彼は踵を返して振り返ることなく階段を登っていった。エカルもそのまま彼について行きかけたが、不意に振り返ってエルヤをまっすぐに見つめた。

「……盾、使わないのか」

思いもかけず少年の口から突然発せられた言葉は、いささか間の抜けた質問だった。エルヤは少年の瞳を窺うが、純粋な疑問以外そこには何もない。本当に何もない。まるで二人は初対面のようなであった。エルヤはこの薄情な少年をねめつけた。

「魔獣の大きさを見れば分かる。かわせなきゃ終わり。盾なんか必要ない。兜も鎧も。……皮一枚で助かるってことはあるから、皮鎧だけは身につけるけど。あなたも、元気になったみたいね。あれからひと月だからね」

少年の瞳がかすかに動き、彼はゆっくりと顔を伏せる。エルヤはその様子を見て声色をやさしくする。

「異人には異人にしか分からないことがあるし、私には生まれと育ちがある。だから私は、自分

の意思で化け物と関わるの。もちろん、現実的な問題もあるけど。ほら、行きなさい。闘技の砂場が本当にあの化け物に相応しかったのか、見せてあげよう。見たことないでしょ。……観客席からは」

彼女が階段を指差すと、少年はのろのろとそちらへ向かって去った。どうも頭がちゃんと働いているのかどうか怪しい。エルヤは心を持たない人形を相手にした気分だった。

「いけそうか？」

バドが尋ねる。エルヤは大きく息をついた。

「終わるまでは分からないわよ。でもありがたく思っただけいいわ。私はあの化け物の葬り方を知っているもの。今だにあなた達は、私の頭がおかしいと思っているようだけど」

「まあまあ……がんばってくれや。期待してるからな」

そう言ってからバドは、しばらくエルヤの顔を見つめた後、来た時と同じように帰っていった。

——顔を覚えておくつもりだったのかな。皆、私が死ぬと思ってるのね。私も半分はそう思ってるけど。……やれやれ。

彼女は小気味の良い音をさせて、両の頬をぱちんとはたく。そしていそいそと後ろ髪をかき上げて、檻のテーブルから髪紐を取った。

人々は驚いた。プログラムを見直す者もいれば、アリーナに現われた人物が異人だと知ってただ物珍しがらるだけの者もいる。歓声が上がるはずの一瞬は、人々の当惑の声に取って代わった。

秋の澄んだ陽射しの中に、ナバルの珊瑚を思わせる白い肌を持った長身の娘が立つ。陽光に火花を散らす白金の髪は、頭上に三つ編みの冠と結われている。胴には膠で黒く煮詰めた皮鎧。胸の真ん中には磨き抜かれた真鍮の円盤が取り付けられ、娘が動くたびに日の光を強くきらめかせた。獣に対する目くらましをかねた装飾である。鎧の下から膝丈までの朱色の短衣が覗く。独特の長い両手足は一糸もまとうことなく、日の光に白い。両の手には金色の長剣を下げているが、刀身は剣にしては太く、締まった細い腕に対してひどく無骨にも見える。

人々は、彼女が久方ぶりの冥界の番犬にたいする挑戦者であることを知った。そして彼女が、まもなく現われる番犬の腹の底に納まるのも明白であった。異人とはいえ挑戦者が女であることで、観客席からは試合をやめさせるようにとのディアーラへの信仰篤き声も幾つか上がる。一方でこの対戦を喜ぶ者達もいた。その多くは旅行者であり、他所では珍しい女剣闘士の試合を見に来た者達である。

——ここで試合を中止されたらまずい。

エルヤは観客達の反応に危機を覚える。彼女は素早く金の剣を天に向かって掲げる。観客席がやや静かになった。両の剣を頭の上で交差させ、彼女は大きく息を吸った。

気合一閃、彼女は頭上で交差させた金の剣を振り下ろし、体の前に突き出す。剣の軌跡に青白い月の弧が残り、剣が突き出されると共に髪をうって淡く弾け散る。観客席から感嘆の声が上がる。それと同時に、魔獣を轟頂にする人々の嫉妬に満ちた罵声も上がった。口々に戦乙女の名を呼ぶ声も混じる。異人は短い安堵の息をつく。

彼女は観客席を見回し、カファス達を探そうとしたが、あまりの人の多さにすぐ挫けてしまった。かわりに番犬の持ち主だという貴族を、特別席の中に探す。カファスはその貴族を頭のはげた老人だと大雑把に言ったが、それに該当する貴族は四人もいた。ただ、四人の中の一人が最も熱心にエルヤを凝視しており、あれがクディブかもしれないと、彼女は考えた。

「異郷より現る白皙の乙女！ かの恐ろしき魔獣に挑み、みごとその剣を心の臓に埋めることができるか！ いまここに魔術を用いた剣の舞踏を、魔獣と異人との舞踏をお見せしよう！」

進行役の口上に、エルヤはどきりとした。魔獣との舞踏。確かにその通りである。彼女が闘技場の楽士隊にあるリズムを教えていたことが、関係者の耳にも広く届いていたのだろう。口上はこれから始まることをまさに言い当てていた。

「舞手よ！ 冥界の番犬を地下から解き放つ。用意はいいか！」

エルヤは歌人として鍛えた咽で、これに答える。

「私が合図を出し、太鼓が六つ打ち鳴らされたら、解き放て！」

彼女は答えながら番犬が出てくる闘技場の門を見据えて、アリーナの中央へと歩む。彼女は背筋を逸らして剣を構え、頭上で刀身を互いに打ち合わせた。それを合図に、楽士隊の太鼓が一定のリズムを刻み始める。一本の笛の音が、独特の拍子をとって太鼓を導く。太鼓が六つ目を打ち鳴らした。

門の奥から、一つの咆哮が上がる。それは闘技場の中央に立つ彼女に、戦慄として襲い掛かる。彼女は全身が栗立っていくのを感じる。暗い門の奥で、一對の瞳がきらめいた。と、次の瞬間、門の闇がそのまま白日の下に飛び出す。彼女はかの獣の影の中にいた。天を振り上げば、魔獣の赤い瞳と目があった。

凄まじい砂埃とともに魔獣は地に降り立つ。人々は異人の姿を失った。

「五の舞！」

なめらかな女の声が、観客のどよめきを裂いて響く。単調な太鼓の拍子が一変して激しいものになった。砂煙の中に、再び青い稲光が光る。娘が煙の中から躍り出た。金の剣を持つ腕を体の横に伸ばし、彼女は独楽のように回る。勢いをつけた二本の剣が魔獣の後ろ足を横様に襲う。魔獣は吼えて彼女から離れた。

エルヤは魔獣の全身を初めてひと目のもとにおさめる。魔獣は巨大な獅子に似た体躯を持っていた。たてがみはないが、全身は漆黒の長い体毛に覆われている。瞳と口の中は深い紅色で、四肢は彼女の胴よりも太く、熊のものに似ていた。太い尾は長い飾り毛で覆われ、アリーナの砂を掃いている。神々しいまでの力強さに満ちた美しい獣であった。しかし、かの獣を魔獣と呼ばしめるものは別にあった。魔獣の瞳に宿る光である。彼女は見た。かの魔獣の瞳に奥に眠る、数多くの言葉を。彼は多くの言葉を持ち、感情の嵐を抱え、それでいながら何も語らず、何も表現しないものであった。彼が欲するのは飢えを満たす餌でなく、他者の生命そのものであり、肉体から離れ行く魂の軌跡だった。

彼女の与えた最初の攻撃は、魔獣の黒く艶やかな体毛に弾かれていた。魔獣は数歩後ろ足をひきずっただけで、すぐに体勢を立て直す。エルヤの胸についた小さな鏡からの反射に、赤い瞳を細める。

エルヤは旋風の舞を続けながら、魔法を口ずさむ。金の剣の軌跡から薄い炎の衣が生まれる。燃える紗の羽衣は、剣の素早い回転によって長く引き伸ばされゆるやかに天に向かって昇って行く。雨だれのように打ち鳴らされる太鼓は強弱の波にうねり、笛の音は雨を切り裂いて飛ぶ海鳥のように鋭い。人々は秋の陽光が弱まったように錯覚する。彼らの目に、空にたなびく炎の帯が陽光よりも輝いて映る。

息を呑む緊張が観客席に満ちる。魔獣が踊り子に向かって飛び跳ね、太い前足を大きく横にかいたのである。ところが、踊り子の剣はその一撃を受け止める。剣の動きに合わせて炎の帯が大きくうねる。彼女は根を深く張った大木のように、その一撃にびくともしなかった。魔獣は彼女の舞を乱すことはできなかった。彼は前脚に傷を負い、一声叫んで後ろに飛びずさる。踊り手は変わることなく身軽に旋回しながら、魔獣を見つめ続ける。

「三の舞！」

太鼓の拍子が重く力強いものになる。その強い一打ちごとに、天に上った炎の衣が燃える雨に変わり魔獣めがけて流れ落ちる。魔獣の背は燃え上がった。魔獣は仰け反り、後ろ足で立つ。柔らかな顎下が無防備になる。

エルヤは追撃をかけない。あくまで太鼓に合わせて舞い続ける。魔獣から目を離さず、ゆるりと長い右足を伸ばし、太鼓の一打ちと同時に大きな一步を鋭く進める。両腕は垂らして体の横につけ、双剣は砂の地面に二本の軌跡を描く。

魔獣が重たい四肢で再び大地を踏みしめる。次の太鼓のひと打ちで、エルヤは素早く剣を構えて静止した。魔獣は背に炎を負ったまま、エルヤを飛び越し向かいの壁に向かって走る。そして、炎の背中を壁に向かって打ちつけた。壁の上の観客席から悲鳴が上がり、人々は我先にと火の粉から逃げ出す。太鼓のひと打ちと、魔獣の体当たりで歪む壁の唸りが重なる。魔獣は幾度も壁に地面にと体を打ちつけ、炎をすり潰す。ついに炎が煙と消え、魔獣はふらふらと頭をめぐらす。エルヤはすでに踵を返し、剣を構えたまま魔獣を見据えている。

闘技は完全に異人のペースで進んでいた。魔獣は彼女の恐るべき舞を一切乱すことができなかったのである。観客達は彼女の勝利を信じ始めた。ところが。

魔獣が頭を下げ体を低く伏せた。真っ赤な口が僅かに開き、異人の魂を求める鋭い牙が覗く。怒りの息がシュウシュウと口蓋に響く。

エルヤが、魔獣を誘うように両の腕を左右に広げた。鏡を飾る鎧の胸が、白い首筋が、無防備にそらされる。彼女の喉は、うっすらと浮いた汗に輝いていた。

魔獣の後ろ足が地面を蹴った。一瞬のうちに、エルヤは魔獣の前足の下に敷かれる。魔獣は彼女を踏みつけた前足をばねに、跳躍した。巨体が生み出す風に砂塵が巻き上げられ、血しぶきがその中で影として飛び散った。彼は大きく弧を描いて宙を飛び、轟音とともに降り立つ。

砂塵がおさまった後、仰向けに倒れた異人の姿が明らかになる。彼女の髪はほどけて広がり、砂と混じり合って白金色のしとねとなっている。胸は赤く染まり、剣を握ったままの両腕は力なく投げ出されていた。

誰にも理解出来ぬ展開だった。彼女は攻撃も防御も何もなさなかった。彼女に三の舞を指示されたままの太鼓がとまどい、力を弱める。

魔獣はゆっくりと彼女に歩み寄る。彼は前足を再びエルヤの胸の上に置き、彼女を押さえつけた。そして首を下げ、その頭を食いちぎろうと口を開ける。

轟く咆哮が天に響く。人々を見た。異人の白い両腕が動き、その先にひらめく金色の軌跡が、魔獣の首を左右から襲ったのである。剣に白い稲妻が走る。魔獣の被毛が逆立ち、傷口から黒煙があふれる。太鼓と笛の音はついに消えた。

魔獣はよろめき、後ろに下がる。剣の一本が、その重みのために傷口から抜けて地面に滑り落ちた。魔獣は静かに体を伏せ、全身を震わせる。赤い目を細め、薄く口を開けてはっはと短い息をする。

異人の腕が、地面の上に投げ出された。彼女の上半身は、魔獣の血と自身の血で朱に染まっている。彼女は頭をもたげ、起き上がろうとした。地面を搔く手は剣を求めている。彼女は剣に向かって手を伸ばし、その半ばでついに力尽きた。

観客席のカファスは目を凝らし、魔獣とエルヤとを見比べる。両者はどちらも動かなかった。隣の席の観客が呟いた。

「終わったのか？ 相打ちか？」

「こりゃあ、見せ物じゃねえ。いつの時代の奉納闘獣だ」

カファスは呟いた。しかし、魔獣はまだ生きている。エルヤの片足も、動いていた。エカルが黙って席から立ち上がった。

「小僧、すわっとれ……。ありゃ、だめだ」

カファスは少年の袖を掴む。ところがその手は彼が思っていたほどの力はなかった。エカルはそのまま観客席の前列へと去る。最後には走り出していた。

カファスは汗で冷たくなった背中を感じていた。重傷の魔獣は、やがて死ぬだろう。しかし、手負いの獣ほど恐ろしいものはない。まして魔獣は最強である。アリーナに人を出して魔獣を始末し、エルヤを回収することは危険すぎた。闘技場の衛兵達が高所から弓を射て魔獣をしとめようとしても、漆黒の被毛を通して矢が刺さるか怪しかったし、エルヤに流れ矢があたる可能性も、暴れた魔獣が彼女を踏み潰してしまう可能性も否定できない。勝利者となった娘を助けることは、諦めるしかなかった。

その時、観客席の前方で息を呑む緊張が走った。カファスは慌てて腰を上げ、そちらへ走る。なんとエカルが、最前列の柵を越えてアリーナへと飛び降りてしまったところである。カファスは柵から下を覗く。飛び降りるにはやや高さがあり、少年は下でうずくまって足の痛みを耐えているようである。カファスは魔獣に視線を上げる。魔獣は新たに現れた敵に注目していた。その肩が僅かに動き、すぐにでも立ち上がって襲いかかろうとしている。

異様な緊張で静まり返っていた闘技場に、重たい門扉が開く音が響いた。カファスはアリーナに通じる闘士用の門が開いているのに気がついた。そこから現われたのは、鎧兜で完全武装したバドと、午後からの闘技に出場するはずだった剣闘士の男達である。彼らは体を低くし、素早く静かに散開する。

魔獣が鋭い動きで立ち上がった。彼はエカルに背を向け、一人の剣闘士に向かって突進していった。悲鳴が上がり、剣闘士が魔獣に跳ねられて宙に飛ぶのが見えた。

「逃げろ！」

誰かが叫び、逆に幾人かの剣闘士達は魔獣に向かっていった。彼らの武器は魔獣の強靱な筋肉に弾かれ、一切役に立たない。瞬く間に数人の剣闘士達が魔獣に蹴散らされる。次いで魔獣は、剣闘士達が出てきた門に向かって突撃をかけた。門の側にいたバドは必死の形相で門の中へ飛び込み、門はすんでのところで閉じられた。

すでに闘技会は中止の状態となっていた。アリーナは混乱を極め、観客席から激励と叱咤の怒号が沸きあがる。魔獣は騒ぎの中でますます錯乱し、暴れていた。

エカルは隅の方で魔獣の様子を伺い、地面に伏せるようにして、倒れた剣闘士の一人に近づいた。エルヤを助けなければならなかったが、その前に魔獣の動きを封じなければどうにもならない。彼は剣闘士の兜を脱がす。それから近くに転がっていた剣を手にとろうとして、やめた。並みの剣が役に立たないことは、すでに分かっていた。離れたところに、エルヤが使っていた金色の剣が落ちている。彼はそれも横目でちらりと確認しただけだった。彼はその剣の重さを知っている。魔獣の素早い動きに対応できるほど、あれを自在に操る腕力と体格はない。

エカルは兜を被り、他の武器を探した。魔獣が駆け込んでくる。エカルは肝を冷やした。かろうじて彼は魔獣を避けることに成功する。彼は魔獣を振り返る。魔獣の首に、エルヤの剣がまだ一本刺さっている。

魔獣が別の敵めがけて再び走り出す。その隙に、エカルはちょうどよい武器を見つけた。素早く駆け寄り、彼は棍棒を手にする。それから立ち上がろうとしたとたん、彼は思いがけず足を吊った。激痛が右の脛に響く。彼は堪らず地面に手をつき、唇を血がにじむほどに噛んだ。アリーナに飛び降りた時から感じていた。彼の脳裏には、剣奴であったときの戦いの記憶が鮮明に残っていた。ところが今の彼の体は、その記憶の中の動きをまったく再現してくれなかったのである。怪我が治ったばかりで体が弱っていただけではない。日々の厳しい訓練をしなくなった体は、すっかり鈍ってしまっていたのである。彼の戦士としての自尊心は深く傷ついた。また、彼はそのような誇りを持っていた自分の心に初めて気がついた。

彼は頭を動かし魔獣の姿を探す。闘技の場にいることが、戦士としての彼を支えた。鈍い体なりに動き方を考え、ことをなさなければならない。彼は体を起こす。視界に魔獣の黒い巨体を捉えた。

魔獣は一人の剣闘士と相対していた。剣闘士は非常に大柄な男であり、手には三叉の槍を握って必死に威嚇している。彼の数歩後ろには、エルヤが血の染みた砂の上に横たわっていた。別の男がエルヤに近づこうと試みているが、魔獣に恐れをなしていまだできずにいる。

エカルは走った。魔獣は直前まで、目の前の剣闘士に気をとられて気がつかなかった。彼は魔獣の背後から接近し、狙い澄まして魔獣の首に刺さっていた剣を棍棒でさらに奥深く叩き入れる。

魔獣の咽から、これまで聞いたこともない咆哮が漏れた。それは、いくつもの人間の断末魔の叫びを束にしたようだった。まだ相手は生きている。エカルは咆哮におののきながらも、さらにもう一撃加えようと棍棒を振り下げた。しかしそれより先に、魔獣の前足が彼の頭を打った。

彼は軽々と空に向かって弾き上げられる。自分は今空を飛んでいると、激しく移り変わる目の

前の景色から彼は知る。あまりに頼りない浮遊感から、飛んでいるのはもしかしたら自分の頭だけで、体は魔獣の足もとにあるのではないかとも思う。そして次の瞬間、全ての現実とともに彼の体は地面に打ち付けられた。全身の激痛が彼の意識を襲う。

彼は瞳を見開いた。魔獣が黒い塊として見える。息が荒くなっている。誰の？ 自分の呼吸とも魔獣の呼吸とも、彼には判別がつかなくなっていた。魔獣の息が青白く輝いている。エルヤが自力で上体を起こし、魔獣に向かって高らかに語りかけている。それとも、言葉ではなく呪文だったのだろうか。魔獣の体が震え、黒い姿が陽炎のようにゆらめいた。エルヤは胸の傷に手を当て、自身の血に染まった手を天に差し出す。そして再び地面に伏した。数人の剣闘士達がエカルに習い、魔獣の剣を狙って攻撃を加えようと武器を振り上げている。

徐々に暗くなっていく意識の中、彼はあの大きな剣闘士が槍を投げ出しエルヤを抱き上げ、門に向かって走るのを見た。剣闘士がエルヤの長い足を扱いかね、門をくぐる際、柱に思い切りその足をぶつけてしまったのも見た。それから彼の焦点は投げ出された自分の腕の上に移った。彼はまだ手に武器を握っていた。彼はたとえ意識を失っても、武器を放すことはなかった。訓練士が感心したこともある、彼の性であった。ところが今、もうろうとした意識の中で、彼は武器を握る手を緩めた。棍棒は砂の上に転がった。生まれて初めて自由な意志で戦いの場に降り立った彼は、もはや戦士であり続ける必要はなかった。彼は自分が最初から、奴隷でも剣奴でもなかったことに、気づき始めていた。

混乱を極めた闘技会最初の演目は、魔獣が青白い息を撒き散らし、冷えゆく心臓からこれまで捕えていた亡霊達を解き放つことによって終わった。亡者達の悲鳴は長く尾を引いて闘技場を旋回し、やがて都市の北西に位置する火山の火口へと消える。人々は身を寄せ合ってこれらを見守り、観客席の特別列を占めていた戦の女神の巫女達は、神の加護を求める歌を歌い、亡者達を弔った。

地上は現の光を失い、なかば神話の世界へと彷徨っていたが、闘技場の地下には現の苦しみと喧騒が一切合切あふれていた。松明がここかしこに灯され、ひどい熱気と煙の中、怪我人がぞくぞくと運び込まれてくる。重傷人から奥へ入れろと怒鳴る者、いかめしく突っ立って、自分こそ重傷人だと言い張る血まみれの剣闘士。担架に載せられたまま、すみに追いやられそのまま忘れられ、一人痛みに呻く者。魔獣に止めを刺そうとしたのか、闘技場の一角に展示されていたカタパルトが運び込まれていたが、用を失くした今ではただの障害物として通路を塞ぐばかりだ。

エカルは硬い木の板の上で目を覚ました。全身に鈍い痛みが残っている。重い腕を上げ、額に触る。額はかなりの熱を持っている。兜は脱がされたようだった。額に触れた腕を再び上げると、手のひらに色が写っているのに気がついた。額に緑の顔料で印をされていたらしい。まだ焦点のおぼつかない目で、左右逆に写っている手のひらの文字を読む。

――放置。

エカルはごしごしと額を擦った。

彼は体を起こす。どうやら地下の医務室に運ばれたようだった。周りには木の粗末な寝台が並べて置かれ、その幾つかに男が横たわっている。彼が立ち上がると、すぐ近くに寝かされていた

男がこちらを向いた。

「寝ていた方がいいぞ。お前、頭からはっ倒されていたろう」

男は片足に添え木を当てられている。エカルはその一つ向こうの男を見やる。そちらの男は意識を失っているようだ。その額に、エカル同様「放置」と書かれている。医者に見捨てられたのか、それとも唯一の治療法を後から来た看護師に知らしめるものか。恐らく、後者だろうが。

「おい、待てよ」

男が自分に話しかけていることも意識に上らないまま、エカルはふらふらと医務室を後にする。熱に浮かされた頭に残っているのは、砂の上に横たわる異人の姿だけだった。壁に手を沿わせ、彼はあてもなく薄暗い通路を進む。通路に面する部屋から、松明の揺れる明かりのみが道を照らし出していた。白い前掛けに血をにじませた看護師らしき者や、金色の兜を被った女剣闘士、武器を抱える闘技場の奴隷などと、時々すれ違う。

ざわついた通路のどこかから、耳慣れたカファスのだみ声が聞こえた気がした。エカルは耳を澄ます。通路を逆戻りし、脇の階段を登った。

「おう、お前か」

エカルの前に、巨大な影がぬっと現われた。バドである。彼はいきなりごつい指でエカルの顎を掴んで、彼を右や左に向かせる。しばらくした後、バドは舌を鳴らした。

「右耳の上んところが、ぱっくり割れとるじゃないか。傷口を洗って糊を塗っただけで、包帯もなしか。やれやれ。闘技場つきの医者がエルヤを診ていたら、あいつは死んどったわい」

バドは通路の端にエカルを寝かせ、耳の上に布切れを当てて手で押さえさせた。バドはエカルの隣にしゃがむ。彼らの目の前には部屋の入り口があり、ランプの明かりが暗い通路に漏れていた。エカルが室内を確かめようとする前に、カファスが彼の視界を遮って鼻息荒く現れる。カファスは横たわったエカルにちらりと一瞥を投げた。

「クディブの野郎！ 魔獣の次は異人か！ あの糞爺め！ 俺から何もかも取り上げて、この期に及んでまだ取るつもりか！」

カファスはこぶしを握り、肩を怒りで震わせる。彼は片手にエルヤの鎧を抱えていた。それをバドに投げる。エカルは頭をもたげてその鎧を見た。胸の鏡は見事なまでに二つに裂け、金属片が内側に曲がっている。内側に曲がった金属片は、彼女の胸の傷に食い込み、なおかつ傷口を開いたままにさせていただろう。

「助かったのか」

エカルは鎧から目を逸らし、カファスを見上げる。カファスは部屋の中を、力いっぱい睨みつけていた。彼は部屋に視線をやったまま、歯軋りを繰り返した。

「あの爺がな、お抱えのトーラッド人の医者をよこしてくれたんだ。外科手術の知識が深いんだとよ。あの国の連中は。……ああ、くそ！ あの野郎、うまいことエルヤを搔っ攫っていきやがって！ 俺が世話した異人だぞ！」

「まあまあ……。エルヤもこれで助かるかもしれんのですから、いいじゃないですか。それにあれは別に異人奴隷でもないでしょうが。いくらあのじいさんでも、そうそう好きにはできんでしょうて」

「まあな……。それはそうかもしれんが」

バドの言葉にカファスはうな垂れる。彼はエカルに立つよう促した。

「帰るぞ」

「……でも」

「あれはクディブが引き取る。どっちみち、当分あの医者の治療が必要なんだ。痛み止めがなければ、呼吸だってまともにできんらしいからな。お前も家に戻って、しばらく安静にしとった方がいい。まったく、無茶をしおって。首の骨がへし折れてもおかしくなかったんだぞ」

カファスは居残るバドに手をあげ、後も振り返らず地上への階段へと足早に進む。エカルは何度も振り返りながら、彼を追った。

「午後からの催しは夜から再開されるそうだ。あいつの訓練所の女が出るし、一応エルヤも一時期とはいえあすこに所属しとったからな。娘が意識を取り戻した時、知った顔が見えたら安心するだろうって言うんだよ。馬鹿か、あいつは。俺は今日中に奴が目覚ますとは思えん。甘やかしすぎだ。それにしてもまったく、番犬めが。死んだ後も一苦労だ。ディアーラの巫女達が清めの火で魔獣を焼いて、闘技場側も、観客どもには気付けの酒を配り、ハボス火山には調査隊を送り、アリーナの汚れた砂は不吉だからってんで、大掃除をせねばならん。まったく、あの魔獣はどこから捕まえられてきたんだ。密猟者どもが、どっかの聖域か禁断の地かで見付けたってのか。冗談じゃない。この町に天罰や呪いが落ちたらどうする！ そうなったら全部、クディブのせいだわ！」

カファスは聞かれもしないことをべらべらと喋り続ける。平常を装おうとはしているようだが、常より多い口数は、彼の気が動転していることを如実に表している。それを察したエカルは、彼に尋ねてやった。

「なにか損害を受けましたか」

「そうだっ！ 全部あの女のせいだ！」

打てば響くように、カファスは立ち止まって叫んだ。ガラガラした耳障りな声が、地下いっばいに響く。

「気付けの酒も、調査隊の費用も、怪我をした剣闘士達の治療費も、夜間試合の照明燃料も、俺が半分も出さなきゃならん！ あの騒動は、エルヤが糞犬にちゃんと止めを刺さなかったせいだからな！ ほんでも、残りの半分とアリーナの砂はクディブ持ちだ。ところがどうだ！ あの金持ちにゃ、痛くも痒くもない出費だわい。おまけに俺から異人まで取り上げよった！」

カファスの文句は再び最初に戻ったようである。彼は石床につばを吐いた。それでも言いたいことは全て吐き出してしまったのか、その後は憤然としたまま黙りこくり、外の荷車にたどり着くまで彼は口を聞かなかった。エカルが荷車に騾馬をくくりつけて手綱を握ろうとすると、カファスは大きな尻を乱暴に御者台に滑り込ませて、エカルを横に追い落とした。彼は太く短い指で、エカルに荷台を指差す。彼なりの気遣いだったのだろう。エカルは大人しく荷台によじ登り、縁にもたれ掛かる。

闘技場の外は中から出てきた観客と野次馬で溢れかえり、人々は盛んに魔獣の最後について繰り返しては、靄にかすむ火山の影を彼方の空に振り仰いでいる。中にはエルヤについて、あるこ

とないことを話す者もいる。あれは本物の戦乙女で、まがまがしい魔獣を葬るためにディアラに遣わされたの、魔獣を迎えに来た冥界神の使者だのという話はまだましで、カファスがイリーナの密林でテナガザルと一緒に捕獲した伝説の女狂戦士だという話まで出ていた。

大抵の者は、かつてない闘技を目の前にし、興奮して怯えていた。またある少数の者達は、自分達が目にしたものが、遙か異郷の神聖な生贄儀式の一つではないかと感じていた。なぜなら彼らの見た異人の舞は、豊穡の女神や戦の女神の神殿で、巫女達が舞う奉納の舞と、ほぼ同じ雰囲気を持っていたのである。それは単純でありながらも、厳粛な気配に満ちている。魔獣を倒すだけなら、舞う必要などなかった。不思議な技で二本の剣を操った異人は、より実際的な戦い方をいくらでも選べたはずだ。彼らはそう見抜いていたのである。しかしその考えを確証するものは何もなく、彼らは互いに集まり声をひそめて憶測を述べあう以上の事はできなかった。

やがて荷車が都市の中心をはずれ、大きな屋敷の立ち並ぶ住宅街へと入る。人影は少なく、ひっそりとしていた。エカルは闘技場前の喧騒の中で聞いた様々な噂を反芻する。あの闘技は最初から最後まで、太鼓の拍子が続いていた間まではすべて、エルヤの思惑通りに進んでいたのではないか。彼女が魔獣の攻撃を誘い、胸に傷を受けたのまで、すべて彼女の算段であったはずだ。彼女の動きに迷いはなかった。焦りがはじめて見えたのは、魔獣が地面にうずくまった後だ。彼の脳裏に、剣を求めて砂の上を彷徨う、異人の白く長い腕がよみがえる。あの時あの腕は、ひどく悲しげに見えた。

「助からんかも知れんなあ……」

御者台からカファスが一人呟いた。エカルは体を屈め、瞳を閉じる。あの異人の生死が、自分の身の上にどのような影響をもたらすのか、彼には分からなかった。異人の面影が記憶から薄れていくにつれ、闘技場で悟った自己の意識すら遠く霞んでいった。

季節は移り、暦の上では冬が来ていた。あの収穫祭以来、エルヤの生死はまったく分からなかった。引き取ったクディブは誰にも異人のことを話さず、むしろ隠したがっていた。カファスも最初の方は、用事にかこつけてエルヤの消息を得ようとクディブの屋敷を訪れていたようだが、最近はそのようなこともなく、自分の仕事に集中するようになっていた。

カファスの屋敷は大小二つの中庭を持つふた棟続きの、立派な豪邸であった。召使の奴隷も多くいたようだが、魔獣のために落ちぶれたカファスがそのほとんどを売ってしまい、料理女一人だけになっていた。屋敷の一部を物置として貸し出してもいたが、十日ほど前に相手と契約を切り、エカルに命じて昔のように家具調度を運び込ませた。猛獣を買いに来たらしい金持ちや貴族も、時に屋敷へ訪れる。それらを見る限り、カファスの商売は勢いを再び盛り返してきつつあるようだった。バドは度々この屋敷を訪れては、カファスと酒を飲んでいた。彼らは、魔獣が町に現れる前の生活に戻りつつあった。

エカルはカファスの屋敷で働き続けていた。時間が経つにつれ、闘技場で最後に感じた喪失感は薄れていった。彼は奴隷として、自分を取り戻しつつあった。彼は漠然と、カファスを新しい主人だと思いはじめていた。そしてカファスが年をとって死ぬまで、このような生活が続くのだろうと思っていた。

エカルの意識とは裏腹に、周りの者は誰一人として、彼が奴隷として育てられた人間だと知らなかった。西から流れてきた浮浪児程度にしか、見られていなかった。

カファスは時々彼に、自分の持っている獅子や虎などの猛獣を見せに連れ出してくれた。彼は表向き、同い年の少年達のように驚いたり喜んだりしてカファスを満足させたが、内心では物足りなさを感じていた。猛獣達が檻の中ではなく、広い大地を駆ける様を見たいとも思った。

町の市場は冬でもなお、旅の商人達の運び込む色とりどりの商品で賑わい、活気に溢れている。商人達の客を呼び込む口上は、彼の耳に幼い頃から染み付いた懐かしいものではあった。彼は一度一人で、頼まれた買い物のために市場に出たことがある。その時ふとその口上に郷愁を感じて足を止めたが、そのためにあっという間に商人達に取り囲まれてしまった。

さあ、お若いの、北海産の琥珀はいかが？

若旦那、このレンクードの絹の手触りを見てくれ。柄は今はやりの、向かい合う鹿に月桂樹の飾り小円だ。

マーレ！ 若さに満ちた人に美の女神の祝福を。この香を服につけて町を歩いてご覧。若い娘がぞくぞく寄ってくること間違いなしだよ。

カファスの古着を着ていたせいもあるだろう。まるで、自分が対等の人間、それも身分の良い人間であるかのように商人達が寄ってくる。奴隷であった彼には信じられない体験だった。彼は恐ろしくなった。自由人として見られることに、嫌悪しか催さなかったのである。彼は一目散に屋敷に逃げ帰り、それ以降決して一人で出かけることはしなかった。終日、黙々と屋敷の雑用をこなす彼に、何も知らないカファスはあきれたようだった。

「お前、群を追い出された老獅子みたいな目をしとるじゃないか。明日の仕事は明日に残しとけ。外に行って、同い年の餓鬼どもと喧嘩でもして来い。そうだ。今度の闘技会に、少年部門で出場してみたらどうだ？ 小遣い稼ぎにいいぞ」

「カファスさんがそう仰るのなら……」

「別に強要はしとらん」

カファスはむっつりと答えた。

エカルは屋敷の物置の隣に寝床を与えられていた。彼はそこに、唯一の持ち物である豎琴を隠していた。エルヤの豎琴である。バドが届けに来たのを、預かっていたのだ。主を失くした豎琴は、ほとんど鳴らされることはなくなっていた。エカルは時折その弦を爪弾いてみるのだが、豎琴は嫌々割れた悲しげな音をたてるだけである。五つある弦の内、二本は目に見えてたるんでいた。弦を張りなおさなければならないのだが、弾き手がない以上、切羽詰った仕事でもなかった。

収穫祭からふた月経とうかという晩のことである。エカルは、酒を飲みに行ったまま帰りの遅いカファスの為に、屋敷の玄関にランプを灯して彼を待っていた。冷え込みは厳しくなっており、彼はマントの中で両手をさすっていた。料理女のフォルティナは、このような寒さは珍しいと言っていた。この地方では冬でも雪が降るのは、山の上だけだそうだ。海からの湿気は山に当たり、そこでみんな雨か雪になって落ちてしまうためらしい。エカルにしてみれば、雨は珍しかったし雪にいたっては見たこともない。

カファスが泥酔していたら、寝室まで彼を抱えて行かなくてはならない。カファスの方もそれに安心しているのか、飲みたい放題飲んで帰ってくるが多かった。月が天頂に達する頃、ようやくカファスの機嫌の良い歌声が通りの向こうから響いてくる。エカルは玄関の蹴上げから立ち上がった。カファスがエカルを見つけ、彼を抱き寄せるとぼんぼんと力任せに背中を叩いた。「おうおう。お前もまあ殊勝なこってなあ！ お前に髭が生える頃になったら、俺が店に連れて行って良い娘を紹介してやるからなあ！」

エカルは黙ってカファスの腋の下から頭をいれ、体を支えながら玄関の蹴上げを登らせる。主人の声を聞いて、真っ黒な飼犬が尾を振ってまとわりついてきた。カファスはお機嫌そのもので、犬と間違えエカルの髪をくしゃくしゃに撫で回す。嫉妬した犬がエカルに吠え付く。この犬はエカルを自分の下に見ていたのだ。エカルはすべてに忍耐強く耐え、重たい中年男を引きずって一步一步先へ踏み出す。

その時、鋭い口笛が夜気を裂いて彼の耳に届く。彼は振り返る。玄関口のランプの中に、長身のマント姿が現われる。と、その体が傾き、あわやという所でマントから突き出た長く白い足が体を支えた。白い腕が壁に伸びる。エカルは呆然のあまり、カファスを取り落とす。カファスががま蛙のように、狭い廊下にひっくり返った。犬がけたたましく吼えた。

エルヤが息も荒く、長い髪を振り乱したままランプの明かりを背に壁にすがり付いて立っている。

「おだまり！ 馬鹿犬！ 黒い犬なんて大っ嫌いよ！」

エルヤの一喝で、犬は尾を後ろ足の間挟み、犬小屋へ逃げてしまった。カファスがすっかり酔いの冷めた顔で、立ち上がる。

「……お前、生きとったんか？」

エルヤはカファスを焼き殺さんばかりに激しくにらみつけた。しかしその顔は衰弱が酷い。エカルとカファスが彼女をこわごわ見守る中、彼女の頬から突然ふた筋の涙が炎の輝きをうけて零れ落ちた。白い唇が震える。

「なんで……」

彼女はゆっくりと膝をつく。

「なんで、誰も迎えに来て、くれなかったのよ……」

そして彼女は、前のめりに倒れて動かなくなった。エカルは彼女に近づき、恐る恐るその体を上に向かせる。涙の跡を残したまま、彼女は気を失っていた。エカルの肩越しに覗き込んだカファスが、呟く。

「こいつ、まさかクディブのそこから抜け出して来たんか。やばいな」

カファスはエカルの背中を突いた。

「とにかく、気絶しとる今だ。目を覚ますと荒れるぞ。今のうちに、そうだな……。よし、客室に運べ！ フォルティナ！ 起きろ！ 客室に寝床を用意せい！」

彼はよろめきながら屋敷の奥に駆け出した。

翌日、朝早くからクディブの命を受けた私兵二人がカファスの屋敷を訪れた。カファスはしらを切り、エルヤが生きていたのかと吃驚してみせ、彼女の行方など知らないと答えた。

「だいたい、俺はあの女を利用しただけだ。魔獣がくたばってくれりゃ、万々歳だよ。姿が消えたのか。そりゃいい。俺も約束の金を払わずにすんだんだからな。俺んところより、バドの訓練所を当たった方がいいんじゃないか？ あの男、あいつを甘やかして大事にしてみたいだから、あいつだって帰るならあっちの方がいいに決まっとうよ」

拳句の果てに、バドに厄介ごとを押し付ける。私兵達が帰ってしまうと、カファスはエルヤの寝ている客室に顔を出す。彼女はすでに目覚めて、朝食もとった後だった。カファスは寝台の上で寝そべるエルヤの射るような視線を受け、おっかなびっくり向かいの臥台に座る。

客室には造り付けの石の臥台が二つと食卓があった。エルヤの寝台は臥台の一つにフェルトを何枚も重ねて敷いた簡単なものだった。しかし、そのフェルトも彼女が体にかけている上掛けも、この屋敷にある最高のものである。携帯式の小さな暖炉はカファスの寝室にあったのを、昨晚エカルに運ばせたものである。西方の細工師による金の山羊の装飾がほどこされた見事な品であった。

「あー……、で、傷の具合はどうなんだ？」

エルヤは冷たい表情のまま片手を上掛けから出し、人差し指を動かして彼を招き寄せる。カファスが彼女を上から覗き込むと、エルヤは寝巻きの前を両手で掴み、よく見ろといわんばかりに怒りに任せて左右に開いた。脇の窓から差し込む朝日が、彼女の胸元を照らす。胸骨の位置に、今だ生々しい血のにじんだ傷跡が長いかぎ裂きの線として走っている。傷口は黒い絹糸で縫合されていた。強い薬草の香りが、カファスの鼻と目をつく。彼は後ずさって再び臥台に腰掛けた。

「相当深かったな……」

「肺と、骨の方が、痛いんです」

エルヤは胸元をあわせながら、ようやく口をきく。

「息をするたび痛みます」

「しかし、随分よく治療してくれたじゃないか。あの傷では、普通助からん」

その言葉に、エルヤは眉間に皺を寄せて唸ってみせた。

「医者には、なんの文句もありません。それにしても、あの、爺……！ いやらしい奴！ 何の用もないのに側でじろじろと。何であいつの見世物にならなきゃいけなかったんですか！」

「クディブのことか？ ま、お前も石像みたいなもんだから、見世物というより観賞用だろう。あいつは珍しいものとか強いものに目がないからなあ。にしても、あの魔獣はやばすぎたがな。お前は魔獣の代わりのおもちゃだ。鑑賞されるだけですんでよかったじゃないか」

「もう……、いいです。ところで、約束の」

「分かっると、分かっるとよ」

「全部、宝石でくれませんか？ 質より量で。小さくて丸い、木の実みたいな石……」

「よしよし。一生ものの傷をこさえてまで魔犬を始末してくれたんだ、何でもいいようにして

やる」

カファスは客室の戸口にエカルが跪いているのに気がついた。彼は朝日を背にし、瞬きもせず寝台に横たわるエルヤを見つめていた。彼はエルヤの枕を手にしていて。絹の袋に羊毛を詰めるようにと、カファスが命じて作らせたものだ。枕の上には、原始的な形の豎琴を乗せている。

「小僧」

カファスが呼ぶと、彼はハッと気がついて目を擦る。立ち上がってエルヤの目の前にそれらを持って近づいた。

「あら、ありがとう」

エルヤは何気なくエカルから枕を受け取って頭の後ろに敷く。そして豎琴を手にとると、あちこちひっくり返して確かめる。

「ああ、弦と皮を張り替えないと」

エカルはしばらく何か言いたそうに、豎琴をためつすがめつ見るエルヤの姿を眺めていたが、結局そのまま部屋を後にした。

その日の夕暮れ、カファスの案の定、バドが頭から湯気を立てんばかりに怒り、凄まじい勢いで屋敷を訪ねてきた。

「あんまりじゃないですか！ クディブの私兵ども、訓練所の中をみんなひっくり返していきやがったんですよ！」

「しゃあないだろ。後で治安部の方が取り締まって、説教垂れてくれたんだらう？ これでクディブも少しは大人しくならあな。ただでさえ魔獣の一件で、手のひら返した町の人間のひんしゆくを買ってるんだ。奴のおかげでハボス火山は『冥界の入り口』なんてふたつ名貰ってよ。あすこ、新しく神殿おったてるんだろ」

「おかげでエルヤの噂が、再燃しとるんですよ。この都市のどこかにあの娘が隠れてるんじゃないかってんで。みんな、娘の姿を見て、魔獣からの恐怖を取り除きたいんで。……まさか？」

「客室で寝てるから、静かに行って来い。奴の屋敷からは、訓練所は遠いからな。それで多分俺んどこに来たんだらうが」

「ああ……。寝てるんなら、また今度で構いませんわ。俺も訓練所の後始末があるんで」

バドはつるりと頭をなで、のそのそと引き返していった。

クディブがいったん大人しくなったとはいえ、カファスは油断するつもりはまったくなかった。彼は仮病を使い、ほとんど常に屋敷にいるようになった。留守の時にクディブの私兵が来れば、ただの料理女では彼らを制止できないからである。エカルならば多少の足止めはできるかもしれないが、暴力沙汰が起きれば、むしろカファスの方が不利になる。地位も力も金もあるクディブ相手に、カファスができることはひたすら隙を見せず、屋敷に他人を立ち入らせないことだけであった。

エルヤはまだ傷の具合が悪く、一日を寝台の上で過ごした。目を覚ましている時は、同じく屋敷で暇を持て余しているカファスを相手に卓上ゲームをし、ときにそれにバドが加わることもあった。豎琴は手入れされたが弦は張られず、部屋の片隅に置かれていた。その側には、炭で描かれた黒い獣の姿がある。暇になれば炭を片手に獣の姿を上塗りし、あるいは豎琴と同様に粗末な

造りの木の櫛で、長い髪をくしけずっていた。これほど穏やかな生活は、漂泊の身の彼女にとっても久しぶりか、初めてのものだったかもしれない。寝て食べるだけの生活で、彼女は次第にふっくらとしてきた。厳しい旅の間に彼女の体から削げ落ちていた脂肪がつき、精悍だった頬も娘らしい丸みを帯びた。栄養を得て毎日くしけずられる髪はつやつやと輝く、まさに陽光の滝である。

エカルは枕と豎琴を届けて以来、彼女の部屋に近づくことはなかった。客室の窓は屋敷の中庭に面していたため、エルヤは中庭で荷物を担いで行き来するエカルの姿を頻繁に目にする事ができた。朝はカファスの屋敷の倉庫に蓄えられている、獣の餌を運び出しているらしかった。昼と夕には、屋敷の補修でもしているのか、レンガや泥の詰まった桶、あるいは赤や青の顔料の塊を持って通り過ぎてゆく。

エルヤは窓越しにエカルを呼び止める。エカルはこちらを振り向き、窓辺に近づいた。大きな窓は、大きな木のビーズを通した木柵の嵌め殺しとなっていた。エカルがビーズの隙間から、暗い客室の中をのぞきこむ。長く伸びた前髪に、石の粉が白く被っている。

「私は、春になったらここを発とうと思う。……あんたはどうする」

「屋敷の外は今騒がしい」

エカルはエルヤの問いには答えなかった。

「カファスさんは何も伝えてないだろうけど。クディブがしつこい」

「そう。なら、もっと早めに発った方がいいのか」

「いや、春まで居てあげてよ」

エルヤがいぶかしがると、彼は続けた。彼が自分からこれほど話し出すのは、彼女には初めてだった。

「楽しそうだ。バドさんも。昨日の晩、酒を飲みながら言ってた。一生に一度くらい、女の一人も守り通してみせないと、あの世のお袋に合わせる顔がないって」

「あの顔で、合わす顔ねえ。そろそろ罪滅ぼしをしたい年齢なのね。どこの元ごろつきかと思っていたんだけど」

「怪我で退役した軍人だよ。上官と部下の関係だったらしい」

エカルは踵を返して立ち去ろうとする。エルヤは、ビーズの隙間から指先を出した。

「これ」

彼女の二本の指先には、小さな赤い貴石が挟まれている。日の光を通して、彼女の指先に透明な赤い影を落としている。エカルはしばらく指先を見つめ、それから窓枠がまだらな影を落とす彼女の腕に視線を沿わせ、彼女の瞳と目を合わせる。

「それはあんたのだ」

「そっちの取り分よ。魔獣に止めを刺すきっかけを作ったのはあんただから。私はしくじった」

「それはあんたのだ」

彼は鋭く彼女を睨みつけ、体を退くと足早に立ち去った。

彼女は後に呆然と残された。遅れて背中に悪寒が走った。自分があの少年をどう扱おうとしていたかに、気づいたのだ。

——主人を持つ奴隷をさらって、私は彼を、生きるべき場所だと信じていた所から無理矢理引き離したんだわ。そして、それが正しいと思い込んでいた。そうか。そうだったのかもしれない。

彼女は唇を噛んだ。

——おまけに何とかしてひき止めようと、彼のご機嫌をとるようなことをして。行き場をなくした奴隷ほど得やすいものはない。前の主人の代わりにでもなろうっての？ 馬鹿馬鹿しい。もう私の役目は済んだじゃないか。あの子は自由な身分を手に入れたんだから、これ以上私に関わる必要なんかない。

悪寒が激しい嫌悪にとってかわる。胸の底に湧いたむかつきは、言葉の形をとる前に押し殺された。

彼女は膝を石を握った拳で叩き、視線をめぐらせて八つ当たり出来そうなものを探した。不幸にもそれらは手近にはなく、とうとう破れかぶれに石を飲み込む。小さな冷たい石は咽を通り、凄まじい激痛で彼女を固まらせた。石がゆっくりと胸の奥を通り過ぎ、痛みがひく頃には彼女も平静を取り戻していた。

——彼を前の主人の下から引き離したことだけは、よかったはずよ。黒い獣と同じ。あそこは彼の居場所じゃなかったはずよ。

昼の光でより濃い影を落とす部屋の中、壁の獣が目に入る。

エカルは奇妙な胸騒ぎを覚え、床から体を起こした。冷たい夜気が毛布の間に流れ込み、彼の体に添い体温を奪う。彼は身震いをした。

炎の夢を見ていたように思う。ところが目覚めた後も、その炎は消えることなく心で静かに揺れている。

火事だろうか。

いまだに消えない火の夢が、彼を不安にさせる。彼は再び横になり、毛布を体にきつく巻きつける。目を閉じると、炎は彼の心によりはっきりと、その像を結んだ。炎は音もなく、薄衣のようによじれて闇を舞い、ほどけて広がり波を打つ。金色に燃える輝線が炎の衣を縁取っている。

エカルは現に戻り、立ち上がった。履物をつっかけ、中庭へ出る。風は透明で、身を切るように冷たい。彼は中庭の水盤に歩み寄り、両手を浸す。水をすくって顔を洗うと、心にたなびく炎は消えた。それでも、胸のざわつきはおさまらない。

頭を振って、前髪についた水滴を払い落とす。夜空には星が、町の物見塔には月がかかっている。夜空が明るいのは月のせいだ。吐く息は白い。首の後ろと耳の上の傷跡が、かっかと熱かった。

彼は仕方なしに、屋敷を見回ることにする。中庭を横切り別棟へと入る。彼は真っ先に台所へと向かう。そこはほんのりと暖かい。かまどを覗くと、熾きの赤い色が見えた。隣室から聞こえるいびきは、フォルティナのものである。彼はそっと台所を後にする。

母屋に戻り、カファスの寝室の前へ行っては見るが、そこにも火の気はない。エルヤの部屋も同じようなら、もう火事の心配はなかろうと、エカルは足早に中庭の回廊を廻って再び別棟へと入る。

彼は昼間の出来事をほとんど忘れていた。何かに腹を立てたようだというくらいの認識しか残っていない。腹を立てた理由にいたっては、まったくの謎である。あの感情は、彼の心の知らない部分から突然噴出したのだ。奴隷として教育されていた彼は、負の感情をたくみに押し殺す訓練を積んでいた。しかし押し殺された感情は、その時の記憶もまた曖昧にする。

黄色い明かりが、狭い廊下の先に見えた。彼は駆け出しかける。そしてすぐに、その光は火事によるものではないことに気がつく。あれは灯火の色だ。火の元を見つけて、彼の胸騒ぎもようやく収まった。かわりに不審と心配が湧く。まだ夜明けも遠い真夜中に、なぜ部屋の明かりがついているのだろうか。

真っ暗な廊下を手探りで抜けると小さな中庭に出て、真正面に客室の窓がある。木製ビーズの透かしが入った木枠の窓から、エルヤの姿を見通すことができた。彼女は窓に背を向け、心持ち前傾姿勢をとっていた。エカルは立ち止まり、その後姿を窺う。彼はエルヤの右肩が腕まで露になっていることに気がついた。丸みを帯びた肩には長い髪がほつれてかかり、蒼白の肌とともに今は灯火によって一色に染められている。遠目にその姿は、人間の女となんら変わるところがない。

その長い右腕を見るにつけ、エカルは闘技の日のことを思い出していた。剣を探し、太陽に焼かれた砂の上を彷徨っていた腕は、剣ばかりを求めていただけではなかったのかもしれない。あの時なぜ自分は観客席から飛び降り、彼女を助けようとしたのか。これもまた、出自の分からないあの怒りと同じ所から出たものだろうか。

それにしても、彼女は何ゆえこんな夜中に起き出しているのか。傷の具合が悪化でもしたのか。しかし側へ行くのはためらわれた。

彼女は右肩を脱ぎ、傷を縫い合わせている糸を抜いていた。痛みは残っていたものの、それは一度砕けた骨に由来するもので、傷自体はほとんど塞がっていた。青銅の小さな裁縫用ナイフで、ふつりふつりと糸を切る。ぼんやりと傷を見つめる瞳は、半ば脳裏の記憶をたどっていた。糸を切るたびに、魔獣との戦いの一瞬一瞬が、太鼓の音とともに蘇っていた。

客室の隅には、小さな祭壇が造られている。壁に炭で描かれた魔獣らしき黒い獣がおり、その下の台には葡萄酒の満たされた銀の小盃に、香をくべた小さな炉がある。全て彼女自身が用意したものだった。

強く引いた糸が傷に引っ掛かり、痛みを呑みこむ。引きつれた傷口に血がにじんだ。

屋外は物音一つない。大気の冷たさは、慣れれば心地良かった。その静寂と冷気が、ふいに強くなる。彼女は窓の外を見ようと顔を上げた。

雪の気配だと思っていた。それは間違っではおらず、間もなく白いものが舞い降りはじめたのを、彼女は確かに見た。いつの間にか、戸口に佇んでいた少年の肩越しにである。彼女は面食らった。いつからそこに居たのだろうか。雪とともに今突然現われたわけでもあるまい。

寝台脇の灯火台の明かりは戸口から遠く、彼の表情までを照らし出すほどではなかった。彼は月明かりと灯火の明かりの狭間に淡い夜影を纏って、静かに佇んでいる。しばらくどちらも身動きをせず口もきかない。

やがてエルヤが少年に視線を残したまま、そろそろと右腕を寝巻きの中に肘から入れ、袖を通す。すると、エカルのかすれた声が聞こえた。

「まだ、糸は抜かない方がいい」

感情の薄い静かな口調の中に、彼女はどこか弁解めいたものも読み取る。

「どうしたの。まだ夜明けは先よ」

尋ねてみたが返事はない。少年の立ち姿が戸惑うように揺れただけだ。

「……明かりの中へいらっしゃいな。そんなところに立ってられちゃ、落ち着かないから」

エカルはその言葉に従うように、静かに寝台の側まで近づいてきた。明かりに浮かび上がった顔つきは、なぜ自分がここに訪ねてきたのか分からないというように、頼りない様子である。また、戸口から寝台の側まで、僅か数歩の距離ながら彼は随分時間をかけた。その歩みには、彼女の言葉に従ってしまった後悔がにじみ出ているようだった。エルヤは彼に座るよう、寝台の上を軽く手で叩く。エカルはぎこちない仕草で、端に浅く腰掛けた。

エルヤはその横顔をうちまもり、言葉を探す。なのに昼間の彼の声色が思い出されて、彼女の心は震えるだけだった。彼女も実のところ、深い考えがあって彼を部屋に招き入れたわけではない。

窓の外に、雪の気配が濃くなる。

「火の夢を見た」

さきに言葉を見つけたのはエカルの方だった。ほとんど抑揚のない、静かで落ち着いた声色だった。

「目が覚めても消えないで残って、舞っていた。庭の水を被ると見えなくなったから、探しに出た」

彼は一瞬炭の輝く暖炉に目をやるも、灯火台の明かりを凝視する。

「火はここにあったけど、これじゃない。俺が見ていたのは、多分あんたの方だったんだ」

「……違うわ」

エルヤは流れ落ちてきたこめかみの髪を掻き上げる。

「エカル、あんたは火に敏感な感覚を持っている。その夢は正夢になる」

「俺が見た火は、あの日、あんたが操った炎の帯だ」

エカルはエルヤの胸元に視線を投げた。

「その傷は、わざと受けたんだろう。なぜそんなこと」

彼はエルヤの瞳に視線を上げた。彼女はそれを避け、自作の祭壇を見やる。

「そうか。傍目にも分かったかしら」

「死ぬつもりだったのか」

「そう見えても仕方がなかったかしらね。異教の地に連れ去られた気高い生き物が、見世物になっているのは我慢ならなかっただけよ。元の場所に帰せないなら、それ相応のもてなしで、始末しなきゃいけない。あのままさらにたくさんの人間を喰わせていたら、この町は獣の呪いに落ちたかもしれない。この傷の治りが遅いのだって、あれがただの獣じゃなく魔獣だったからよ。時間だけでは癒えない」

そう言って櫛に絡んだ髪を一筋、彼女は炉にくべる。細い煙が上がり、硫黄の匂いが鼻につく。

「……あなた、俺を養うためにあれを倒そうとしたんだろう。どっちにしたって、命をかけようとまでしたのは確かだ」

エルヤは彼の物言いに驚いた。

「違う！」

彼女は押し殺した声で叫び、エカルを振り返る。

「はじめからそんな危険なことをするもんですか！ だいたい何で、そこまでしてあなたに食べさせなきゃいけないの！」

「なら、本当はどういうつもりだった」

「私にも生活がある。異人は一処に留まって暮らすのは難しいし、そもそも私は流れているのが性に合う。人間の国を彷徨っていると、そこに迷い込んだり無理やり連れてこられたりした場違いな存在を見つけることがある。異人もそうだけど魔獣もそう。あれが元いた土地では、神聖な生き物として崇められていたかもしれない……」

彼女の声はおぼつかなく細くなる。そして相手の瞳に凍りついた。彼は酷なまでに澄んだ瞳で、彼女を見据えていた。少年の姿は、謝って許してもらいたくなるほどに、非常な美しさと好もしさを突如としてまもっていた。それこそ、奴隷商人が教育によって彼に与えた、最大の付加価値となる魅力である。この少年の元来持つ聡明さを巧みに加工し、飾りの一つに仕立て上げている。

彼のこの一見高貴に見えて実際には卑屈な姿は否応なく、彼女に断言を避け続けていたことを思い出させる。結局彼女は一人旅の辛さと寂しさに疲れ、一人の見捨てられた奴隷を、旅の連れにしようと盗んだのだ。奴隷であれば手懐け易い。そんな下心を持って。魔獣を倒そうと決めた時同様、それらしいもったもな理由で自分自身を騙しながら。

この自己を殺された少年は、どこまで見抜いているのだろうか。見抜いていないにしても、彼女の嘘ははっきりと捉えている。そのくせ彼自身は、自分がそこまで鋭く相手に切り込んでいることに、気づいているのだろうか。

彼からこのような態度を引き出してしまったのは、彼女のせいだった。奴隷として教育された彼は、相手の望みを見抜くのが余りにうますぎた。そして、彼は奴隷ゆえにその望みを誤解している。

彼女にとってグロテスクだとしか言えない魅力を纏った彼の姿は、彼の瞳の奥に現れている生来の鋭い聡明さによって、痛々しくも壮絶なものとなっていた。奴隷商人の教育は巧みだった。奴隷として必要な性質を、少年の心を押し潰し殺すことなく、うまい具合に彼の性格に馴染ませている。そのことを、彼女は彼の姿から思い知らされた。

彼女の緊張が限界に達し、気を失いそうになった刹那、彼の唇が動いた。

「あなたの望みを幾晩かなえれば、俺を『自由』にして、前の主人のもとに帰れるようにしてくれるのか」

鞭打たれたように、彼女の全身に震えが走った。否定の言葉が洪水のように頭に溢れるが、そ

のどれ一つとして口から出てこない。何を言っても、それは新たな誤解と自己嫌悪しか生まないように思えた。彼女はそのどちらも恐れた。

二人は互いに真正面から向かい合っていた。エルヤは怯え、エカルはいましも彼女に止めをさす行動に出そうだった。彼女にはそう見えた。

ところが、エカルは僅かに首をかしげた。彼にはなぜエルヤが怯えるのか、分からなかった。望みを言うだけなのに、なぜ彼女はそこまで怯えなければならないのか。言えればいい。自分は奴隷なのだから、言ってくればその通りにするものだ。言葉にしたくないならば、その素振りを見せるだけでも良い。何も躊躇することはないはずだ。それなのに彼女は、魔獣と対しているかのように、隙のない緊張で身を固めている。自分は何かまずいことをやってしまったのかと、彼はひどい当惑を覚える。

互いに静止したまま時間だけが流れて行く。やがてエルヤは、エカルの罪のない様子に気がついた。萎縮しきった心が、徐々に冷静を取り戻す。彼女は、詰めていた息を静かにはいた。胸を裂くような恐怖と羞恥心が消え、次に心を満たしたのは感情ではなく、ぽっかりとあいた虚ろな穴である。彼女は気がついた。今は目の前の少年をいたわってやるのが先ではないのか。しかし、それにはどうすればよいのか。

彼女は彼と視線を合わせたまま、腕を下げ、いつの間にか手から取り落としていた青銅のナイフを探そうとした。

ところが、その動作でエカルの表情が変わった。輝くようなまったくの無垢な顔に、意識と知性の影が射す。彼の姿から瞬く間に、異様な魅力も壮絶さも薄れて消えていく。彼は片手を伸ばし、震えながら寝台の上をうろうろと探る彼女の手首をとった。そしてもう片方の手で、彼女の手に青銅のナイフを握らせる。真剣な様子で、ナイフを握った手をさらに自分の両手で包み、よく確かめるように目の前へ持ちあげる。

「ああ、ありがとう」

エルヤが囁くと、彼は彼女の方へ手をやさしく押しやって離れた。彼の表情は先程とは一変していた。瞳の透明な鋭さは跡形もなく、いつだったか、首に巻いた包帯を彼女が代えようとして拒否の仕草を見せたときの、穏やかさが戻っていた。しかしあの時の頑なさはない。かわりに、大切なものを大切な瞬間で、大切な人に取り返されたような、歯痒い苛立ちがあった。

彼女は心が少し軽くなるのを感じていた。目の当たりにしているこの表情は、エカル自身の個性ではないかと、不意に強く感じたのである。彼はこのように怒ったり、すねたりするのだ。今の彼は、自由とまではいかないものの決して奴隷ではなかった。彼女は今の彼の状態を維持し、後戻りしないよう固めてしまいたかった。ところが、それは彼女にはできなかった。彼女にはその力も資格もなかった。それができるのは本人だけだ。

エカルの左手は、二人の間に伸ばされたまま残っていた。彼はまだ目の前の異人に触れようとしていた。数ヶ月ともに旅をしながら今初めて、目の前の異人が物珍しいことに気づいたのか。彼女は緊張に震えながらも、内心で微笑まざるを得なかった。彼はまるで、猛獣を手なづけようとしているかのようなようである。青銅のナイフが彼の心にどう働いたのかは知れないが、何かを変えたのは確からしい。彼はほとんど無意識のうちに、奴隷の精神から脱却しようと、自ら立ち上がった。

りかけていたのである。しかし無意識ゆえにそれは危うい。

彼女は、少年の様子からその危うさを感じ取っていた。だから、彼女は静かに待って、受け入れることしかできない。彼女の内面の微笑みは、やがてその頬に染み出るように、ごくかすかな表情として現れた。

彼の視線は彼女の胸元に注がれていた。彼女は寝巻きの下で傷口から流れ落ちる血を感じていた。胸の間を伝っていたから、寝巻きには染みていないだろうとは思っていたが、彼の視線からすると、もしかしたら染みてきたのかもしれない。

彼が手を彼女の胸に向かって伸ばそうとしたとき、彼女はさすがに身を硬くした。しかし彼は、彼女の咽下にずっと五本の指を添えた。そのまま上体を傾け、彼はわずかに顔を寄せて目を細める。咽元に立てられた彼の人差し指が、彼女の右鎖骨内側の窪みに触れた。彼女はその位置に、小さいながらもかつて深い傷を負った痕が残っていたことを思い出す。彼の表情は険しくなり、傷痕をよく見ようとしてか彼女の方へ身を乗り出したため、彼女は彼の指に押されて上体をやや後ろに仰け反らした。胸に傷のある身としては少々苦しい体勢である。そのため、彼女は右腕を後ろに差し出して体を支える。その時、彼の表情の変化に気がついた。

彼はすでに古傷の痕を注目してはいなかった。かといって、どこを見ているというわけでもない。視線を落としたまま、彼の顔は非常な苦渋に満ちていた。彼なりに彼女との関係を模索する中で、最初に彼女に触れた場所は、彼にとってはどちらにも転べる微妙な位置だったのである。

彼女はそっと首を傾げてみせる。その動きにつられて、少年は彼女の顔に視線を上げた。彼は彼女の表情に気がつく。ややおどけた微笑がそこにある。

エカルは腕を上げ、ごく自然に彼女の頬に触れた。その手を引き寄せ、彼女の後ろに傾いた上体を元通りに直してやる。

氷のように冷えていた頬が、彼の手のひらでぬくもりを取り戻す。彼女は自分が涙を流していたことを知った。驚いた顔をした彼女に、エカルは初めておずおずと、先程の赦しを請うように微笑んだ。

そして彼女の頬を縁取る長い髪に手をうつし、指を差し入れすくいあげる。彼の手に、彼女の髪は暖かだった。しばらくの後、その髪からもそっと手を緩める。長い髪は灯火の明かりを透し、一本一本が濃い金色の輝線となって、彼の指からさらさらと離れた。彼女は深い息をはき、体の力を抜いた。対き照的に彼の面には、緊張した真摯な表情が現れてくる。

エカルは居ずまいを正し、おもむろにエルヤの左手をとった。彼は彼女の瞳を見つめ、ゆっくりとその手の上に体を屈めて額をつける。彼は長い間そうしていた。それは、目上の身内に対するイルシュ式の敬愛の仕草だった。

エルヤは右手を彼の頭の上に添える。彼女は同じイルシュ式の作法を、若干崩して彼に応えた。

「さあ、これで私達は兄弟分ね。古傷から私の過去を垣間見たし、髪からは異人がどういうものか知ったわけだ」

エカルは生真面目な様子で顔を上げ、彼女の言葉をそのまま真に受ける。

「そうだと嬉しい。お互い似たところがあるけど、俺には過去も故郷もないんだ」

少年は目を伏せた。今や彼の無意識の飛翔は力を失い、僅かな間に彼を奴隷から別の身分にとり残して去っていた。彼は今の状況に、戸惑っているようだった。

「ついて来る？」

彼女が尋ねると、彼はすぐに顔を上げた。

「ついて行っていいのか？ この町は好きな感じがしない」

彼女は頷く。

「私はこの大陸を端から端まで渡り歩く。さぞいろんな景色や街が見れることだろうね。あんたが故郷と思える場所も、見つかるかもしれない」

灯火が大きく揺れ、薄暗くなる。エカルは彼女の手を離してすばやく立ち上がり、油を足そうとした。エルヤはそれを制す。

「いいわ。私がやるから。あなたはもう休みなさい」

「傷の手当てを。出血している」

「分かってる。でもそれも私がやるし、あなたの気遣いは嬉しいけれど、糸は全部抜くわ。早いところ、クディブの館を思い出させるようなものは、みんな取り去ってしまいたいよ」

エカルは気遣わしげに目を細める。エルヤが血で汚れた寝巻きを脱ごうと片袖を引き抜くと、彼は慌てて部屋から出て行った。

彼の姿が窓から見えなくなるのを確認すると、彼女はそっと額に両手を当ててうつむいた。やがて灯火が消えても、彼女は長い間そのままだった。

あまりに不公平ではないか。彼が精神の崖っぷちに立っていたことを知っていたのは、彼女の方だけだった。彼女はずっと極限状態で彼と対し、彼の方は無意識と自然体の狭間にいただけなのである。

ところが一方で、少年の無意識は本人だけではなく、彼女もまた助けていた。いや、恐らく少年の方は、彼なりの方法で、彼女を助けようとしていたのだ。それがきっかけとなって、あの不思議な飛翔を彼にもたらした。彼女の心の闇を見抜き、彼の心を彼女のすぐ側まで運んできてくれたのだ。

少年は意識の奥底に、目覚めた知性を隠している。彼が認識できない感情と行動の全てが、そこから発せられている。彼を癒す大きな力を持っている。そしてその知性は野性的ともいえる。目覚めているとはいえ、いまだ自覚されることもなく、御されることもないままの危険なものだ。しかしこれこそが、彼女が彼を盗み出した真の理由である。彼女は彼が内に秘める大いなるその力に、魅せられていたのである。

外は一面薄白くなっていた。雪はやみ、積もったばかりの雪が風で舞い上げられている。エカルは足早に中庭から立ち去った。

彼は火のことを忘れていなかった。母屋の中庭へ戻り、屋敷を見回しながら、物珍しい雪に足跡を残して遊ぶ。

ところが、足はすぐに止まった。玄関口に人影を見つけたのである。反射的に近くの柱に身を

隠す。人影は二つで、低い声でごそごと話し合っていた。この時間帯、人の家先でこのような挙動に出るのは九割がたが盗賊の類である。エカルは舌打ちをした。カファスの犬はどこで自堕落な眠りをむさぼっているのか。彼は大股で彼らに歩み寄る。血がたぎっていた。彼は隙のない構えで、彼らの前に姿を現した。

二つの人影はエカルに気がつき、あっけなく逃げ出した。エカルはそれを追う。しかし、玄関先の異変に気がついて足を止めた。彼はついに火を見つけた。軒先にぶら下がっている木の玉が火を噴いている。木の玉の下には大きな水溜りがあったが、匂いからすると灯火油である。玄関の中ほどまで油浸しになっていた。軒に通じる木製の柱も湿っている。放火らしい。

エカルは素早く玄関屋根の上によじ登り、木の玉を吊り下げている鎖を外して慎重に引っ張りあげる。屋根の上から放火犯の逃げた方角を見ると、彼らの姿が雪の中にくっきりと浮かび上がって見えた。彼らはクディブの屋敷がある方角に逃げて行く。火事を起こし、家の中から避難してくる者を目撃したかったのだろう。エルヤを探すにはあまりに粗末な手口である。彼はあきれると同時に、クディブの力も一時のようではなくなったと考える。魔獣による闘技場の後始末や火山に建立する神殿の費用がかさんだ上、町の人々のひんしゆくも買っていた彼は、凋落の途にある。かと言ってこのまま何もせずにいれば、今後も似たような嫌がらせは受けるだろう。

エカルは燃える木の玉を中庭の水盤めがけて投げる。火は煙を上げて消えた。彼は屋根の上から空を見渡す。

にび色をした雲海の狭間に星が輝いていた。月は山々の陰に今しも落ちようとしている。巨大な闘技場は都市の中央に黒々と横たわり、彼はそのやや西南に、ディアーラの神殿の屋根を見ることができる。その方角をよく確かめ、彼は屋根から飛び降りる。そして神殿に向けて、全速力でかけた。

翌日、昼過ぎに目覚めたエルヤの下へ、カファスが首をかしげながら現われた。カファスはしげしげとエルヤの姿を見つめ、また首をかしげる。エルヤは鼻をぐずらせながら、彼を見返した。

「似とるかなあ……」

「何がです？」

「いやな、誰だか知らんが、ディアーラの神殿にある戦乙女の像のひとつに悪戯した奴がいるらしいんだが」

「はあ？」

「像の胸元にな、お前の持ってる傷と同じ傷が刻まれとったんだ」

エルヤは唇を噛んだ。

「お前を治療した医者が、像の傷を見てそう証言したんだ。この傷の形をしっとるのは、医者とその弟子、クディブと傷の持ち主本人だけだというてな。町じゃ噂になつとる。魔獣を倒した真っ白な娘は、やっぱりディアーラの遣いだったとな。ハボス火山に新しく建てる神殿に、その像を遷そうとかいう話まで早速出とるんだわ」

「……エカルを呼んでくれませんか？」

その言葉でカファスは合点する。間もなく彼は、エカルの首根っこを捕まえてエルヤのもとに現われた。

「この罰当たりもんが！ いったいどういうつもりだ！」

「すみません」

口では謝っているものの、エカルはそれほど反省しているようには見えなかった。彼は自分のしたことがちゃんと効果を発揮していることを知り、興奮していた。神像に傷をつけたことはたいした問題ではなかった。それは確かに不敬な行為だが、エルヤの戦いぶりはきっとディアーラに気に入って、彼女を助ける行為ならばちょっとした悪戯は女神も大目に見てくれるだろうと、彼は踏んだのだ。

像を見た人々は半信半疑の気持ちでいたが、魔獣の霊を抑える何かは欲していた。ことに、闘技場でエルヤを見、魔獣が吐き出した亡霊を目の当たりにした者は、戦乙女の像が命を得て魔獣を倒しに来たと信じて疑わなかった。クディブはついに、エルヤ搜索を断念せざるを得なかった。搜索を続ける行為は、ディアーラの遣わした戦乙女にたいする侮辱となったためである。

エルヤは部屋の隅の祭壇に目をやる。彼女の描いた魔獣がそこにいた。彼女はそっと胸元に手を当てる。

「女神の守る都市に冥界の番犬が現われた。それを舞で倒した戦乙女がいた。彼女は務めを果たし、この世の虜となっていた魂は火口へ、乙女は再び彫像の中へと戻り、彫像の胸に傷跡を印した。は、は」

短く笑い、彼女はエカルを振り返る。

「ねえ、もうすこし気の利いた結末を思いつかなかったの？」

エカルは困って考えるそぶりを見せる。カファスが笑った。

「無茶を言うな。これ以上の締め括りはないんじゃないか。事情を知ってる俺達には、ありがたくもなんともない話だが、臆病な町の連中は、あの話で魔獣の恐怖から救われるだろうからな。んでもな、お前の舞だけは行く末までの語り草だ。あれは見事だった。本当に見事だった。一生忘れられん」

カファスは天井をあおぎながらため息をつく。ついで彼は、柄にもない柔和な笑みを浮かべてエルヤの肩をたたき、仕事のために部屋を後にした。

それからエカルも、部屋を簡単に掃除して立ち去ろうとする。彼が寝台の脇を通り過ぎる時、エルヤは素早く相手の耳をつまんで引き寄せ、頬に軽く口付ける。彼の機転に対する礼のつもりだったのだが、当人は頬に蠅が止まったほどの反応も見せなかった。彼はそのまま何事もなかったかのように部屋を出て行った。窓から外を覗くと、首から耳まで真っ赤に染まった後姿が足早に遠ざかって行くところである。あれはどちらかということ、からかわれたことに怒っているのだろう。

一人残された彼女は、祭壇を見つめた。

――ただの獣同然に囚われ、異郷で死ななければならないのは、私のような異人も同じだ。人間達は随分色々なものを自分達の世界に取り込むものね。私はお前を死でもってここから逃がそうと剣を使ったけど、お前も鋭い爪で私の旅を終わらせようとしてくれた。あの時もう一人、異郷

からの少年が現れなければ。私は残された命で、もう少し旅を続けよう。この傷も残して、いずれの時に再び裂ければいい。

彼女は立ち上がり、葡萄酒を湿した布で壁の魔獣をふき取る。